

貞丈雜記

八

73
6822
8



門 3  
號 6822  
卷 8



貞丈雜記卷之八

調度之部目錄

- 調度之事
- 藥籠之事
- きんちやくどうりん
- たうむり
- おのがたのむり
- 書棚之事
- 貝桶之事 三ヶ条
- 印籠之事
- 火打袋之事
- 食籠
- 巾着の定
- 法厨子棚之事
- 冠棚之事
- 歌のむらさき之事

雜記八

目一



昭和41年12月20日寄  
原安三郎

- 一 扇の事 七箇条 圖
- 一 上ぎくし袋の事
- 一 どのの物の袋の事
- 一 きんやう油の事
- 一 何まがりの事
- 一 孺形之事
- 一 骨吐
- 一 廣益の事
- 一 泔盃の事 二ヶ条 圖
- 一 心かゝりの事
- 一 提箱の事
- 一 上ぎくし之事
- 一 今の元結の事
- 一 つけものをひの事
- 一 ちんこの事
- 一 香盒
- 一 柙管の事 五ヶ条 圖
- 一 お乱管乃事
- 一 たのう刀の事
- 一 螺鈿の事

- 一 井瑠之事
- 一 きぬ傘の事
- 一 大角赤小きくありの事 圖
- 一 三線の事
- 一 男女じん袴の事
- 一 何の袋の事
- 一 装束傘の事
- 一 日傘
- 一 立傘甚傘の事
- 一 挑灯之事 圖
- 一 何屋の蓋の事
- 一 ぼんねの事
- 一 手袋の事
- 一 琴琵琶の柱の事
- 一 津のあらい投の事
- 一 柄笠の事
- 一 長柄傘
- 一 柄立の事
- 一 手袋の事
- 一 行燈の事

雜記八

- 燈臺之事 圖
- むまび燈臺之事
- 掌燈の事
- 赤枝の事
- 香道之事 九ヶ条 圖
- かせの事
- 玉ヶ丸の事
- 麝香摺の事
- 櫛巾之事 圖
- 藥器の事
- 短檠
- 脂燭
- 蠟燭の事
- 平褰の事
- 硯箱の事
- 敷皮引の事
- まゝの紙
- 犬箱の事
- 水引の事
- 堆朱堆漆の事

- 猪太之事
- かんごう
- 志きれ
- 鴨沓之事
- 蒲團の事
- こまうた
- 袋の事
- 油草の事
- 八脚の案の事
- 焼石の事
- げ
- むげ
- 檣板の裏の事
- はまきらの事
- 図座の事
- 桶の事 二ヶ条
- 沃懸地の事
- 兩皮の事
- 覽第の事
- さくらりめ組の事

- 縫目付の事
- 唐櫃之事 ニヶ条
- 市女笠
- 道具の事
- まち阿しこの事
- あいで書り事
- ちくちりの事
- いの目事
- 羚羊皮の褌事
- 黒法衣文事
- ちくぬい
- あし笠
- 矢立の硯
- かつ草の事
- 油杯の事
- まろきの事
- 茶椀の物事
- さのこの事
- 平文の事
- 家の紋事

- 教物の事
- 蛭巻の事
- 牙像の事
- やくまがの事
- ぬま物事
- やくし木の事
- つのづみの事 図
- おきこの事
- 火桶
- 腰掛
- 柄長瓢の事 ニヶ条 図
- 眼象の事
- 青瑣の事
- のき板の事
- 文箱の事
- こふきの事
- 火取香煙の事
- めせこの事 ニヶ条 図
- 寄懸の事
- 造紙箱

雜記八

ヨロ

- 一 硯箱多硯蓋の事
- 一 鏡表様様の事
- 一 金鞭之事
- 一 鏡箱の事
- 一 混布の事

以上

貞丈雜記卷之八

調度之部

一 調度テウダウとい道具ドウクの事也コト也トふトりク云ク也ト道具ドウクとい出シ家ケ方カタの佛具ブツク也ト俗家ソクカとい調度テウダウとい也ト今イマ時トキ是レ別ワカち俗家ソクカといも道具ドウクといありハセ也ト

一 印イン籠カゴといハ唐カラ玉タマといハ平ヘイをハ入イるコト也ト大オホきハ三寸余サンシユありハ大オホきハ四シ方ホウよりハ四五シユ寸シユありハ也ト法ホウのハ朱シュありハ也ト

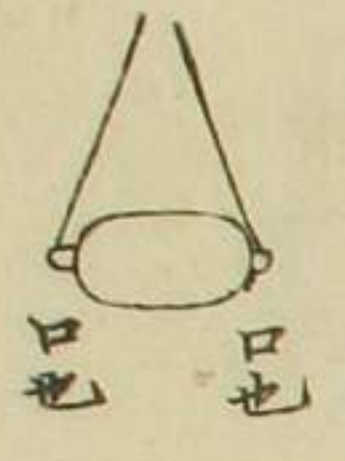
門人  
伊勢貞友  
千賀春城  
岡田光大  
同  
校

大平記世三三三つ  
 大平記世三三三つ  
 大平記世三三三つ  
 大平記世三三三つ  
 大平記世三三三つ

物也今腰より下は右の平袴のこころまでして何れも平袴と  
 云ふあるべし是利敵の時代の云ふ平袴腰より下を云ふべし一は  
 一 藥籠と云物を平袴の如くして九きま糸也唐土より糸を入  
 於物之是も法、糸あり今糸の如くやらうがごとく云ひ糸籠  
 のありの如くあるべし

一 火赤袋と云火赤の備火赤石布くちを入る袋也武士は山狩を  
 乞あるさ、散りなどをすむ故火赤袋を刀小付也大古  
 ヤマトタケノミナトウイ、セイゴツ、ヤマトヒメノミナトクサヤ、ツルギヤ  
 日本武尊東夷征伐の時はおを君大倭姫命草薙の劔を  
 火赤袋付て来りてせらねり始りたり火赤袋は後物を丸  
 く切て裏を付て襦ふ糸をさして法を尊しくむま

○後三年の繪まか  
 袋の如く書物さ  
 子神皇火赤袋を  
 入る中古以来の  
 口也



志むる也古ハ四十以上の人病身ある者ハ糸あり入るなるは先を  
 蒙りて扇中へ下ける中武雜記糸、同糸ある見たり山狩  
 旅行の具ある加敷中ハ襦物ありざる白き襦  
 着きよりやとりたる火赤袋も有り又毛皮青皮綿皮あり  
 しては是れ也

一 せんちやくごうらんなど云物古ハありし也旧記は管て又  
 是ハ火赤袋の變りたる物ある也

一 叶の棚は飾を物とする食籠と云物ハ唐の如くをち一名  
 飯籠とも云うるゆゆを作りたるもあや又堆米あり其貝  
 まてはざるも有り日本の食籠の如し

和名抄ニ竹量ノ  
字ヲカカリナリ

一 昔のものをりといふ竹の物さしコラクに服さしを云曲尺の量たり  
五寸也たのむるにたのハ竹也けとゆと西者海也竹節  
あのをさきと云は同一心也竹尺と書きたのげのりといふ也  
今ハ鯨クシラの皮カをシ作りし者ハ竹マて作り今も竹マて  
しるもまう或はタカハカリ尺と書てタカハカリ空より地マにマりし  
ものを尺に記ひしる付地マより上マのマさしを尺マ或は尺の  
記ひしる物に依りたるをりといふは説用マにマ尺マ  
地マとびりし時物さしをマ持て出て寸尺をさしを尺マと  
りしマ也マ尺マと云ふは尺マと云ふは尺マと云ふは尺マ  
一 尺の定めといふ旧記はありのまじりのまじりの尺の

寸尺乃事也云移すハ曲尺也

一 おのがたがげりといふ旧記はありおのといふれと云何れ我が  
身マのり也我手の大いびんさしマかびをさしげてそれを西すと  
しそ物の寸をとる事マハ食指の中マのりといふのりマを一  
寸とすといふ指をさしめてありといふ賢者灸点をさし付灸する  
人の手マに指の寸を以て灸所の寸尺をとるを同身寸と云も同  
儀マ也マ但マ医家の同身寸ハ中指を  
以て寸を定む也ハ遠身也

一 膳厨子棚マと云本ハ膳厨子マ所マに食物を納め置くマ棚也マ膳厨子所  
調ルマ也マ黒棚ハ厨マ棚也マト云ハマ竈マノ煙マニテフスボリ黒クナル屋ナル  
エマクリヤト云也マクリハ黒也マロトリト通音也  
クリヤト云モ即ハ厨子所ノ事ナリ  
右二の棚本ハ右乃

雜記ハ

三

和名抄第十八章  
初ニアラ置  
タ事見ナリ



かゝ板の厨子  
 の頂上今物の幸  
 智を以て記あり  
 堂上方の元々覺て  
 の時人のうけを  
 るむきのまを納め  
 せく死上のへりも  
 勿論のまむきの  
 のまむきすたよ  
 何れも秘蔵の物  
 をバブー入置あり  
 厨子といひまむき  
 不まのみ  
 佛龕其外器三舞  
 戸ラ付る物ヲ厨  
 子ト云ハ厨子棚ニマ  
 イハアルニ似タレハ厨  
 子ト云也御厨子棚  
 出ル名也

ゆゑある物多しを物を載てあり小便利ある物取を形を極し  
 カクレイ  
 花籠と作て貴人の傍に置之し厨子棚も黒板も古ハ常  
 カタワラ  
 置敷も並てくひあり道真どもを案する棚也今ハ武家  
 こそ、婚籠の付ありてハ用ざる物と思ふをあやまりハ板の  
 びざり板とて定有法もあきるハ婚禮の付ハその旨祝儀を付  
 志げく用る物どもをばふ便す板も並也ハ此並物ども  
 心つのでれハよりハぬぬ日記に記するハ法式の如く成也  
 レンチヤ  
 簾中日記に云みづハたきをいおきハおき物ハおくれ次才とて  
 けくハ厨子板の棚板の面を綿おきて張り寫るを組緒  
 まで何員子と抱えとて緒の餘りを板の方引出してあげた  
 ハミナ

山岡俊明説書棚  
 ハ古ニ云ニ階ナリ能  
 フルヲ厨子ト云トシテ  
 二階ト云リ云

一 結ひ違ふ也類聚雜要鈔に見たり公家より用らる趣也  
 一 書棚と云お今世より厨子書棚ハ書物などを載る板  
 あれハ別ハ書棚と云お古ハあり也今ハ此板ハ書棚の飾り  
 法式ありてまむきハ外の板ハ並れぬ物と明くある見たり能  
 別ハ書棚と云おを作り出たり也

一 冠棚と云お今世より古ハ志を載る本ハ冠を載るなる作  
 カハリタチ  
 とも也後ハ香籠の意も用るハ阿多する云冠棚ハ小櫃  
 マサカツ  
 遠江も政一物と云て造り出ハ後水尾院一献上せられ  
 テニサク  
 を院又は物と云きを加られハかハ此法別を造り出  
 カラケワ  
 此一とて右の冠棚ハ本ハ唐桑とて書棚の板とて上ハ指  
 コマ

犬あり四方の端より唐糸のぬきたり美事あり物こそ又  
或まは禁裏の殿の御座の間に一間ありこれ御座  
の柵と云物を置いて其上に御座を置くこの柵を修冠  
柵と云いあやまり也

一 貝桶を修冠の調度の才と云い拾外ハカリの貝と合せてい合ふ  
物ある御座タビき女ハ兩丈リヤウはまみミと云い御座のつとどりて  
いすめとすも也

一 おひ貝桶と云す婚入記あり貝桶のひますも貝桶と云す  
也是流後の貝桶ハ貝桶と書さる也  
まされぬるまおひ貝桶と書さる也  
おひハおひの略語あり

一 貝覆カヒの事古くよりある源平盛衰記卷五行綱中云西  
言の条

八条推命と云れハ馬車敷も知事チ集りたり藏人何事  
やんと思て思ひけれハ案内者とおぼしめて答多入左殿福系

以下向の由為るは君キミ達舎舎して貝覆のハ勝負也と云

これいきて定宗御の明月記云十二日夕幕下ハツカ被修安嘉門院女  
房ボウ御日来經營事被出貝掩事ル云山家集云モシイシ西行法  
師ノ集

へまど志るものうこれる備ぐりをうひあはせとておひ  
系りたりとて云く事云貝をおひ人の我まのあををい

をきそよをんをいして人の神のうげ膝のあはもて目をく  
おひふああるを人おはされぬよくおひ人のあはすまで

よりあくとるこい思ふびくそちのまげつらあわやうも  
おろくおろのありきくめれよ草紙まよは思ひて出されぬ  
まづ丸を捨て集り後よ志をまよせは思ひついで二つこ  
こけてくちよ白きを十二まよる大きあつハ十まよるぢぢ  
くちひろくハ八まよるやのれもあうまよひのあつんぢぢ  
は流しあをぶづちひさきハ十六まよるはつんぢぢぬるまよ  
いづしとハちとさづつぬるやこすすまよるぢぢぢぢぢぢ  
まよはまよ出いしとあの時ひまよの田持て出すづづまよ  
おろの思ひつうまよをむらそ出まづづまよあは思ひんぢぢ  
まよるぢぢぢぢ出まづづ又下の人もあひつやぢぢ出いぢぢ

大正の日記  
大正の日記  
大正の日記

上をまよせやまよまよまよまよまよまよまよまよまよ  
人志つけいし物をあうまよまよまよまよまよまよまよ  
古今著同集卷十三天福元年の表の以院藻壁門院の方を  
ワのちて繪づくの貝あひありまよまよ方をつちと院を  
門院とち方ち方とこけて勝負をせられし絵すくまよを  
賭物よ出まよ

一歌かたたとまよお古歌近代出来まよ物本ハ貝あひの貝  
より思ひまよて作りまよあか名をハ歌貝と云也又伊勢物語  
は松原のまよの炭まよ歌の下句をまよまよまよあか名貝も  
上の句まよの句をまよ合まよまよまよまよまよまよ名也



海人藻芥雲端幅  
扇橋之事六橋別  
當大小弼延尉持  
十二橋常人持之  
七不季の扇夫集  
志系忠房の秋  
寸長ひろのあう  
を飾りたるおせ  
つれよりあまの  
てんぎ

年中定例記云  
細川殿ヨリ系い  
は扇も今日各  
系をせられ表  
の繪ハ源氏う  
不雲のるおま  
までい捨をく不  
ねハ十五骨ま  
い云  
年中恒例記云  
油扇黒をね伊勢  
守連上之云  
公方様は成夜オ  
は云扇の骨の  
黒骨本よりは  
こまの料砂可  
三職もは持ち  
は彈正女卿ハ  
こまの扇は持  
骨ハ八毛云

ゆく細くある郊園の討ハ園く寅申巳亥の討ハ雞印のゆく丑未  
辰戌の討ハ柿の杖のゆくある腫の形此かある也扇の不季の透  
の秋丸くしてわく又わくして丸く猫の腫の討ハ可か  
倭よとりて名付たるあづ

一六不季の扇の多り年中法大名は成記は云彈正判官直垂  
扇も六不季も一室町記は云畠山彈正少弼持國  
直垂大帷薄香直垂ノ紋白扇六骨云く六不季ハ六本骨之  
是末ひろの扇乃不季を云也  
一扇の不季の多り女房方故実云扇の不季ハ八毛の討ハ白  
を以持のるまぐい思不季より八毛子細あるはりとい云く

貞丈按るより細ある多りハ白骨と書てとくことよむお祝の  
時白骨をいむるべし三光院内府記云蝙蝠平生用之両金  
猫間骨白黒保祿不用之云く又或表束抄云扇の骨常  
ハ白不季を利ぬ凶るハ黒不季を用云く三光院殿の表  
保祿不用之と書あハ凶事を用り叙也又凶事の討ハ地紙  
のまハ花田より無文也極巻葉葉見えあり云家より凶事  
ハ骨文黒漆の太刀を用り黒骨扇を用りも同意也黒骨  
飾り多く闇さ義之武家よりハ既ハ白骨を忌めて黒骨を  
用り多り室町及時代武家より限り多り之忌む所の同意  
出入有るれは此公家は遠て別の武法あり  
みどりハ公家の

雑記ハ

ハ



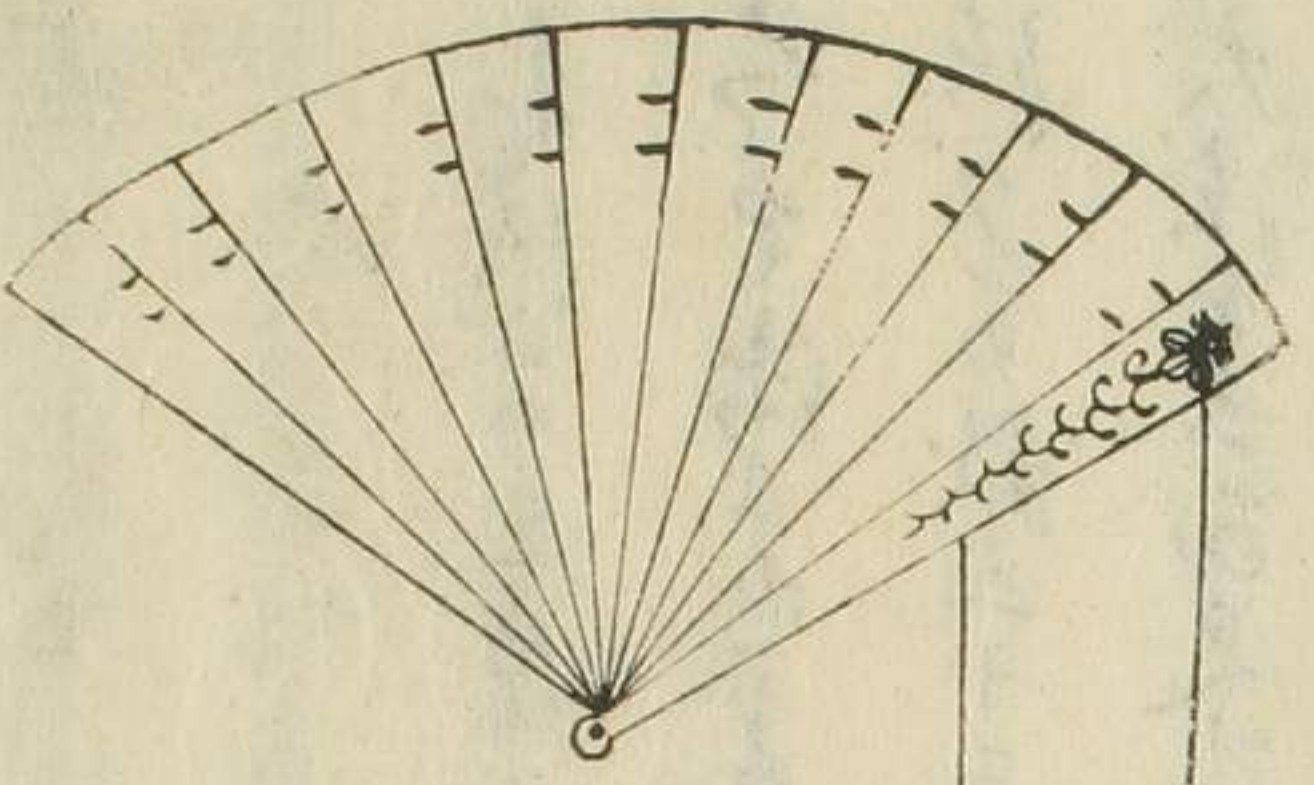
右板を多く包むは五元うさぎ之板を多く包むはうさぎを多く  
 するはあはれ板を多く包むは端を厚くすまはるゝの扇のおや  
 不称の心也 袖扇の扇花の如し



ト千糸ノアマリヲ  
 タルナリ  
 あはれゆき  
 寸端の板を三枚又ハ五枚うさぎ  
 けあめ  
 ○金物蝶鳥  
 ○惣地金銀毒紅或毒紫或皆紅  
 とち糸

板数三十九枚  
 女の持以扇也

右二目



ト五糸ノアマリニテ紋唐草ナドヲ  
 オク又藤ノ花ヲモカクナリ  
 檜ノ木ノウス板ヲ  
 糸ニテトツル  
 板数二十五枚

是ハ男の持以扇也

右袖扇檜扇の作様亦武家の故実ナリ  
 公家亦尋ねて一糸を以て此物といふを知る  
 せんるゝ記也

数箱合羽箱ナ  
 ト云物古  
 葉袋も校差の  
 出来は出来  
 物あるべし系於  
 招軍時代は多  
 也

一 校箱云物古あま物之すハ衣服をハ袋に入れて持せし之是上  
 ぎハ袋云葉長年中此はより此ハより此ハより此袋を用ひま  
 袋はさみ竹を竹をさりうけてはるハ衣服をさるゝ持た也  
 此ハふる葉袋ともぬれちをばらりもひきてよるハさるゝ

雜記八

十

源平盛衰記卷十  
三熊野形玄軍ノ  
糸三黒丸と云出  
中間ノ表差あり  
る袋を括せては  
新を判すべし

依てをすこ竹の代りも箱に入れて持せしむるありしる故をよみ  
第とハ名付する也されどもこ第との相古あり相ある故換第  
の緒の結び換古法ハあり也

一 上さう袋ハ衣服を入袋也指布也紐也大サハ定法も衣  
服の入る程にして入る也大なるも少くたるもも 敷多  
く入ると少く入るとよりて袋の大小あるべし袋の口ハ組糸  
して法づりを止る也 法づりハ 女房方故実を止る也 組糸  
くると法は止る也 女房方故実ハ云うはさう袋のする男のうはさうハ  
法づりの敷三十三五へ女房元の三十二う三十あるべし云々これハ  
大法を云あるへし袋の大小よりて男のハ敷多きとて女房のハ

敷多きとて下指袋の懸地ハ上さうを止る也上さうとハちりばの  
ふさのより糸よりて以五横十文字ハ基盤の目のゆく計目或は斗  
紐づつあうと表たまたす也此上さうも多しハ物をまき入る  
小袋のさけ紐る也袋ハ指布もても後ありても紐の色も糸  
表を付るこれハ糸も定但表の色も同じあるの宜しき云札雜  
関書ハ云うはさう袋ハ巾着を入は持ゆる是ハ袖小袖をもも也  
巾着と云敷実ハ女房元の糸もも也云々袋の中ハ巾着を入  
るは上さう袖を入れ持ありくも小袖もめぬ三様一統云上  
さうのつみ持る袋の多 三々糸小袖入るも包らるもこれ外  
扇も紙上下小袖ありせハヤハふ及ハ侍初めの若の持る

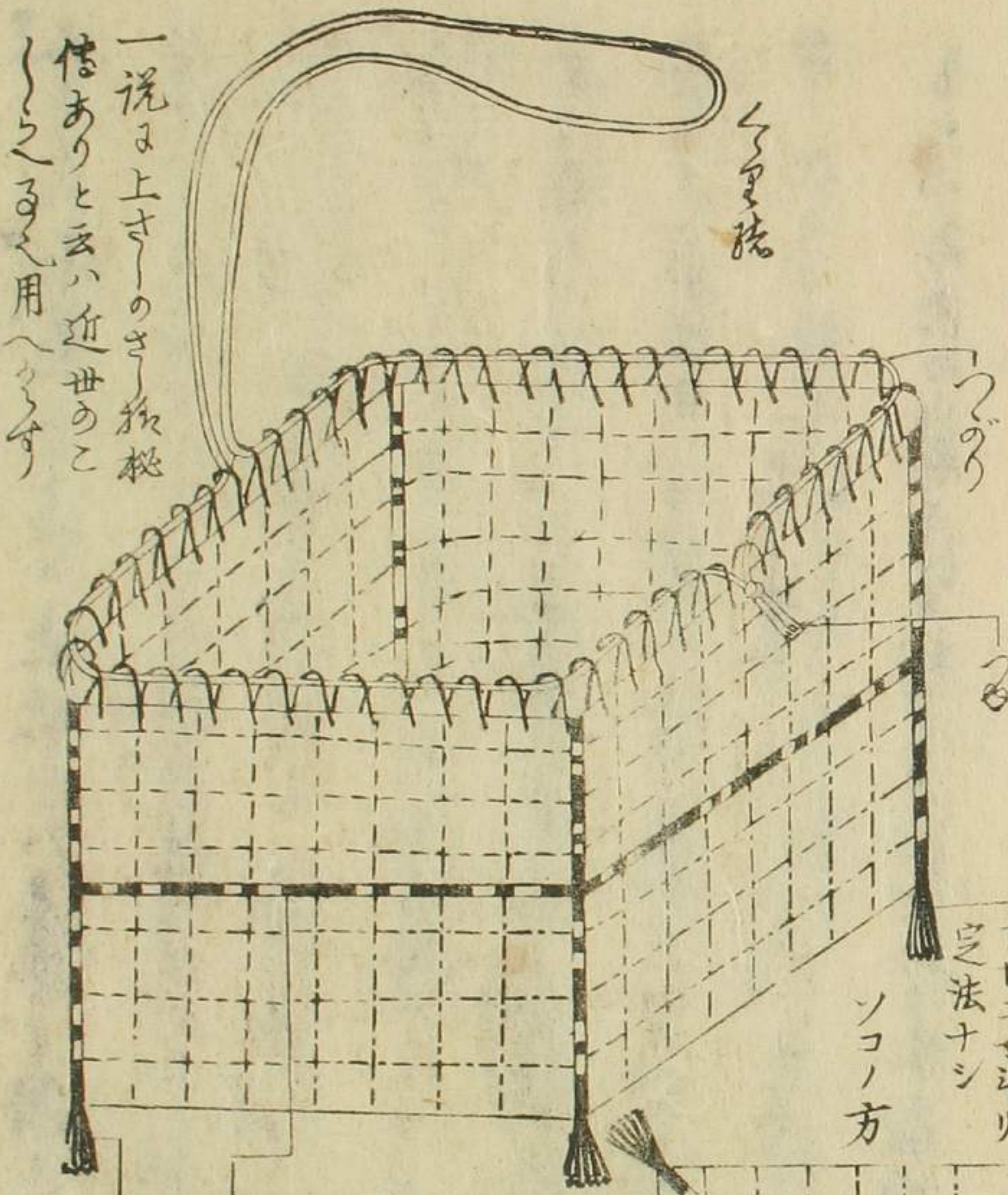


結の結びぎきまのくまをちま<sup>サダ</sup>提て持こふは昨中問ハつゝものぐび  
 をひつぎげん丸<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>持づく<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>新色カ悉ハ結を有るに取<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>り丸<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>  
 袂をく<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>持づく<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>或ハ遠き所<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>おろく<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>く<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>き<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>物<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>上<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>き<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>袂<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ハ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>袖<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>の  
 み<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>限<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ず<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>何<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>も<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>入<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>り<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>女<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>房<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>元<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ハ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>小<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>袖<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ハ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>勿<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>傷<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>之<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>類<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>の<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>け<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ひ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>  
 道具<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>は<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>卯<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>子<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>袋<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>入<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>り<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>て<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>供<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>は<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>持<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>を<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>免<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>也<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>又<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>袋<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>の  
 結<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>の<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>結<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>紐<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>を<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>く<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ち<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ま<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>後<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>に<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>結<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>短<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>く<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ハ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>い<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>り<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>て<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>結<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>一<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>定<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ま<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>系  
 一<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>又<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>古<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ハ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>公<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>方<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>極<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>成<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>の<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>時<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>も<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>上<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>き<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>袋<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>を<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>持<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>せ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ら<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>せ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>也<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>永<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>祿  
 十年<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>成<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>辰<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>五<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>月<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>十<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>七<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>日<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>将<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>軍<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>義<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>榮<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>公<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>朝<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>倉<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>左<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>衛<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>門<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>將<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>義<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>榮<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>が<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>宅<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>一<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>夜  
 成<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>之<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>祀<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>は<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>い<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>り<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>さ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>し<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>此<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>の<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>袋<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>を<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>持<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>こ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>と<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>見<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>え<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>さ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>り<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>い<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ま<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>一<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ハ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>今<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>時<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>を<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>き<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>  
 若<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>持<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>も<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>多<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ま<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>り<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>は<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>他<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>行<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ハ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>必<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>供<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>の<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>者<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>上<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>ぎ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>袋<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>を<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>持<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>せ<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>一<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>又<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>束<sup>サツシヤリキヤシヤ</sup>

具を入りまわさし袋をたとの内物の袋と云  
 の袋と云ふ

ういざ袋の馬

上のふとまり書を  
 することう番の板具を入



一説は上すのき板秘  
 信ありと云ハ近世のこ  
 くこる用へくす

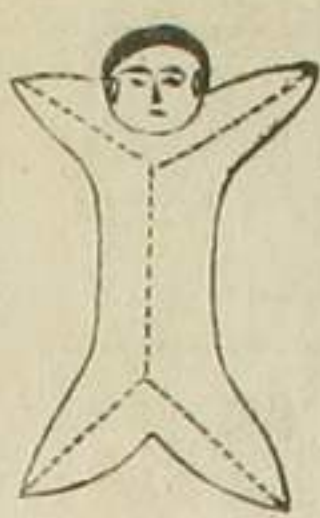
雜記八

十三

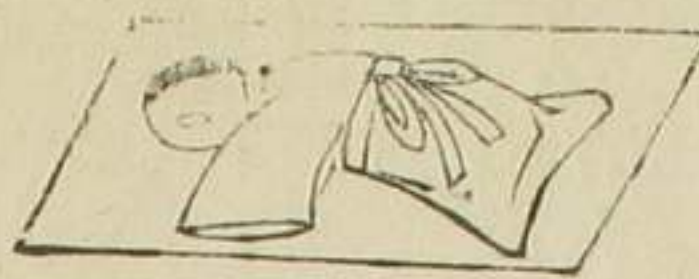
ウハガシぬ此大計小針  
 ニサス也間くの寸九  
 寸寸ホド堅横セ  
 トホス也  
 フトキ平組ニテサシ  
 トホス也  
 平組ノトギアマリノ  
 サキラサキテフサノ如  
 クシテ下ル也



襦袢之図



衣裳を着て  
シト子ノ上ニ置  
ル



左ノ邊ハ産所法  
式ヲ以テ補入ス

巾着ニ両端ニ志んを入ケ 金箔<sup>キンバク</sup>を巻きて色ヲ松竹  
五鶴<sup>イナズナ</sup>魚<sup>イサ</sup>などを繪ク也

○入ケル巾着の圖

大サ是ノ如シ  
寸法定アリ



両端ハ紙を巻きて  
志んを入ケル目子  
も金箔を巻きて  
中括むる巾着の如  
くもなる也

一 あやめつと云物ハ小児<sup>セウニ</sup>の字<sup>ゴモ</sup>の縁<sup>ヘリ</sup>を人形<sup>ニギハヤヒ</sup>を縫ひ綿<sup>ワタ</sup>を  
入ル物也志んをあやめつと云ハあやめつと云ふことされバ  
天児<sup>テンキ</sup>と書てあやめつと云ふことあやめつとこの字を隠されを  
あやめつと云れをあやめつと云ハめつと云ふ事通じと云下つ  
ト五音通じの事也あやめつと云ハあやめつと云ハ記  
一 志ん<sup>シユギヤク</sup>のあやめつと云ハあやめつと云ハ記

作り常ハ志んを巻きてまじりしんあやめつと云ハ今ハ志んを  
アハあやめつと云物ハ志んをあやめつと云ハ志んを  
一 襦袢<sup>シユギヤク</sup>と云ハあやめつと云ハ志ん<sup>シユギヤク</sup>中<sup>ナカ</sup>日<sup>ヒ</sup>に志ん<sup>シユギヤク</sup>武庫<sup>ブク</sup>  
ら<sup>ラ</sup>衣<sup>イ</sup>の<sup>ノ</sup>持<sup>チ</sup>る<sup>ル</sup>使<sup>シ</sup>産<sup>サン</sup>不<sup>フ</sup>レ<sup>レ</sup>糸<sup>イト</sup>例<sup>レイ</sup>式<sup>シキ</sup>上<sup>ウヘ</sup>下<sup>シモ</sup>表<sup>オモテ</sup>之<sup>ノ</sup>取<sup>トル</sup>玉<sup>タマ</sup>  
裏<sup>ウラ</sup>つ<sup>ツ</sup>みて<sup>ミテ</sup>以<sup>ヒ</sup>産<sup>サン</sup>が<sup>ガ</sup>子<sup>コ</sup>す<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>以<sup>ヒ</sup>復<sup>フク</sup>カ<sup>カ</sup>志<sup>シ</sup>め<sup>メ</sup>ぎ<sup>ギ</sup>や<sup>ヤ</sup>割<sup>ワ</sup>の<sup>ノ</sup>以<sup>ヒ</sup>長<sup>ナガ</sup>也<sup>ヤ</sup>  
一 入<sup>イ</sup>大門<sup>ダイモン</sup>より<sup>ヨリ</sup>出<sup>デ</sup>る<sup>ル</sup>三<sup>サン</sup>宝<sup>ホウ</sup>院<sup>イン</sup>殿<sup>テン</sup>ハ志<sup>シ</sup>系<sup>ケイ</sup>也<sup>ヤ</sup>  
一 香<sup>カウ</sup>合<sup>カウ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>ハ香<sup>カウ</sup>第<sup>ダイ</sup>の<sup>ノ</sup>子<sup>コ</sup>也<sup>ヤ</sup>志<sup>シ</sup>系<sup>ケイ</sup>也<sup>ヤ</sup>  
合<sup>カウ</sup>ハ<sup>ハ</sup>盒<sup>コウ</sup>の<sup>ノ</sup>字<sup>ジ</sup>の<sup>ノ</sup>略<sup>リョク</sup>字<sup>ジ</sup>也<sup>ヤ</sup>盒<sup>コウ</sup>ハ志<sup>シ</sup>系<sup>ケイ</sup>也<sup>ヤ</sup>  
一 座<sup>ザ</sup>敷<sup>シキ</sup>飾<sup>シキ</sup>の<sup>ノ</sup>記<sup>キ</sup>骨<sup>ボネ</sup>吐<sup>ハキ</sup>と云物<sup>モノ</sup>ハ志<sup>シ</sup>系<sup>ケイ</sup>也<sup>ヤ</sup>  
唐<sup>タウ</sup>人<sup>ニン</sup>魚<sup>イサ</sup>馬<sup>ウマ</sup>獸<sup>ベツ</sup>志<sup>シ</sup>系<sup>ケイ</sup>也<sup>ヤ</sup>志<sup>シ</sup>系<sup>ケイ</sup>也<sup>ヤ</sup>

雅亮装束抄云  
草鞋をやあいは  
このあしをき  
てと云く是れ  
唐の装束の身も  
あつたこと知るべし

一 履の箱ハ柳葉と書く柳の木を廣サ五分程三角ヲ削リ  
ゆつともよせあつてまのこめ紙よりして二所あつた物也  
長ももも上は居物の大よりよも長程の定足ハ折ぬの  
足のめくまへりあつたれをあよりかひける也柳葉を  
ゆつともよせあつてまのこめ紙よりして二所あつた物也  
定めもあつたゆへに冠經文書籍硯筆墨の物何れも相  
宜の物をのこる也進物あつた臨時のものをあつたある人  
の云近代用の物葉ハ板箱のめくまへり別柳葉のめくまへり  
さん也野宮宰相殿定基のめくまへり古の柳箱をえり  
しよめり身もあり三角の木を紙よりしてあつた作り

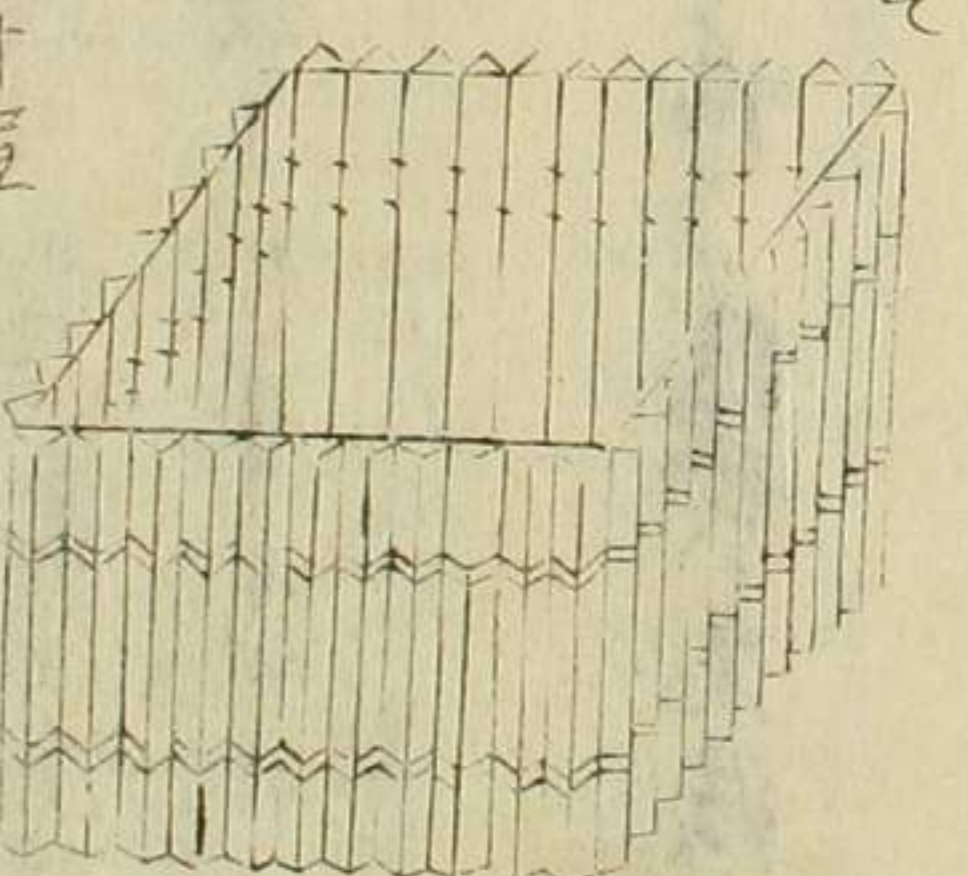
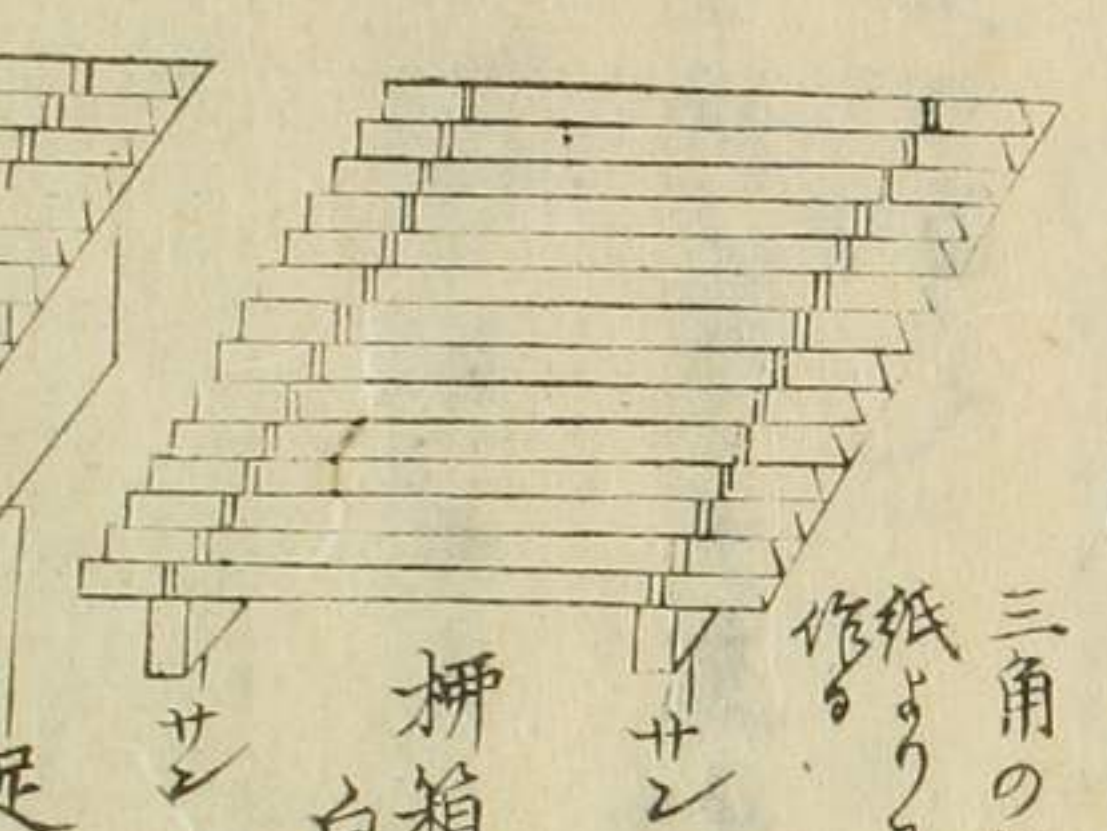
たの物ハ其蓋ハ世々用形をある物と云ふ物也

○履の箱の図

大小定あり何れも入也

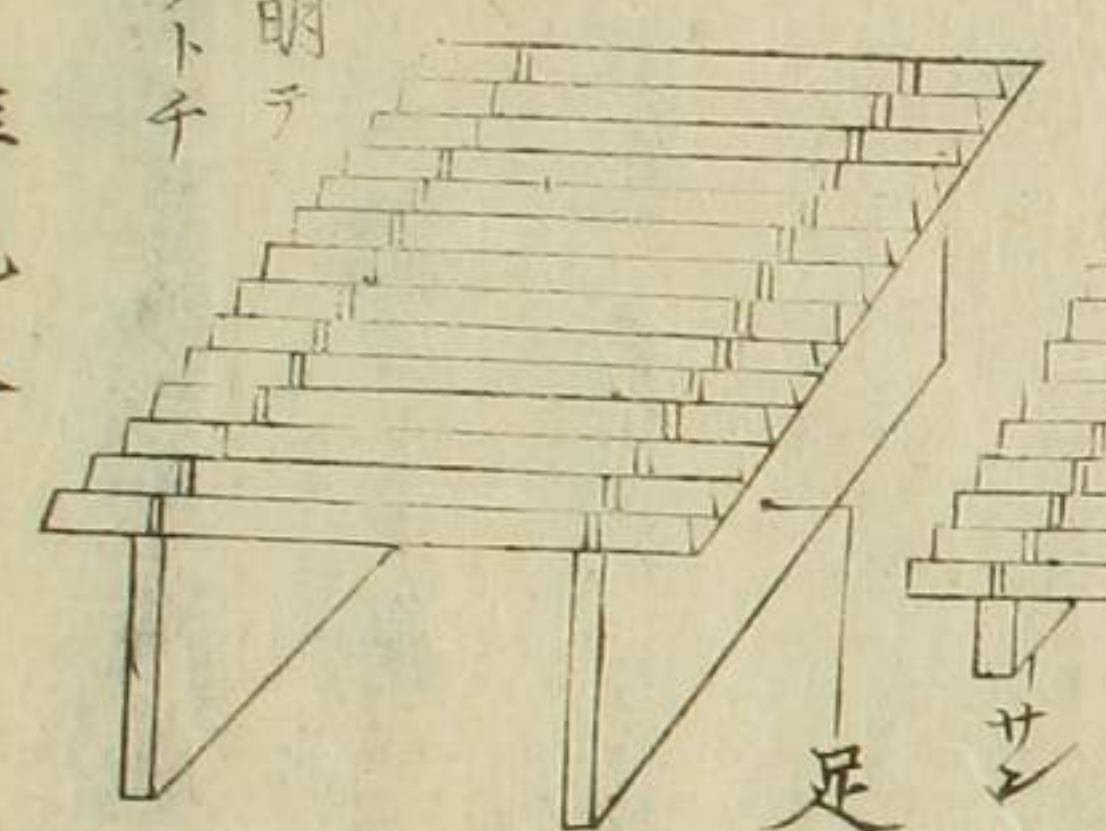
延喜式其外上古  
ノ書ニアル柳箱ハ  
柳行李ノ也

古代



柳箱の身  
白木

近代



後代用るハ此躰ハ蓋のきんをかぎく  
して足ハあつた又近代ハ板の表は  
三角の木をあつたる形をあり付てあ  
む事あり是を釘してあつた  
あり古躰はそむあり

雑記八

一 柳葉は物比羅麻の子はこれ草は云々也  
 一 延喜式は柳葉トダ来生<sup>キイト</sup>あり何り後世元結<sup>キイト</sup>之生<sup>キイト</sup>と云  
 一 也をいふことをやあいはと人あり何り也  
 一 明月記は柳葉と何り畧後あり雅亮装束抄源氏物語の  
 一 延喜式は柳葉トダ来生<sup>キイト</sup>あり何り後世元結<sup>キイト</sup>之生<sup>キイト</sup>と云  
 一 祿の糸のより  
 一 也をいふことをやあいはと人あり何り也  
 一 明月記は柳葉と何り畧後あり雅亮装束抄源氏物語の

一 柳葉は物比羅麻の子はこれ草は云々也  
 一 延喜式は柳葉トダ来生<sup>キイト</sup>あり何り後世元結<sup>キイト</sup>之生<sup>キイト</sup>と云  
 一 也をいふことをやあいはと人あり何り也  
 一 明月記は柳葉と何り畧後あり雅亮装束抄源氏物語の

入テ云く枕草子ありありき物山藍日<sup>カサカキ</sup>け<sup>カサカキ</sup>物<sup>カサカキ</sup>入<sup>カサカキ</sup>テ云く

一 柳相の折敷<sup>テウカス</sup>角ノ木也<sup>テウカス</sup>重半の事徒柳草壽命院<sup>テウカス</sup>抄<sup>テウカス</sup>は<sup>テウカス</sup>法印立安作也長六年作之<sup>テウカス</sup>云親町院一献上シタリ<sup>テウカス</sup>

の時<sup>テウカス</sup>は<sup>テウカス</sup>經<sup>テウカス</sup>表<sup>テウカス</sup>善<sup>テウカス</sup>を<sup>テウカス</sup>居<sup>テウカス</sup>る<sup>テウカス</sup>也<sup>テウカス</sup>柳<sup>テウカス</sup>を<sup>テウカス</sup>以<sup>テウカス</sup>て<sup>テウカス</sup>造<sup>テウカス</sup>之<sup>テウカス</sup>故<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>名<sup>テウカス</sup>也<sup>テウカス</sup>け<sup>テウカス</sup>こ<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>木<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>敷<sup>テウカス</sup>  
 重半の像<sup>テウカス</sup>は<sup>テウカス</sup>家<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>祝<sup>テウカス</sup>あり<sup>テウカス</sup>所<sup>テウカス</sup>短<sup>テウカス</sup>冊<sup>テウカス</sup>を<sup>テウカス</sup>ま<sup>テウカス</sup>て<sup>テウカス</sup>追<sup>テウカス</sup>上<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>耐<sup>テウカス</sup>冷<sup>テウカス</sup>泉<sup>テウカス</sup>家<sup>テウカス</sup>ハ  
 重<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>こ<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>由<sup>テウカス</sup>也<sup>テウカス</sup>三<sup>テウカス</sup>条<sup>テウカス</sup>三<sup>テウカス</sup>光<sup>テウカス</sup>院<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>相<sup>テウカス</sup>傳<sup>テウカス</sup>と<sup>テウカス</sup>て<sup>テウカス</sup>依<sup>テウカス</sup>重<sup>テウカス</sup>半<sup>テウカス</sup>

有<sup>テウカス</sup>吉<sup>テウカス</sup>山<sup>テウカス</sup>之<sup>テウカス</sup>像<sup>テウカス</sup>者<sup>テウカス</sup>肆<sup>テウカス</sup>ハ<sup>テウカス</sup>半<sup>テウカス</sup>を<sup>テウカス</sup>用<sup>テウカス</sup>追<sup>テウカス</sup>善<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>耐<sup>テウカス</sup>經<sup>テウカス</sup>表<sup>テウカス</sup>を<sup>テウカス</sup>居<sup>テウカス</sup>る<sup>テウカス</sup>ハ<sup>テウカス</sup>半<sup>テウカス</sup>  
 を<sup>テウカス</sup>用<sup>テウカス</sup>り<sup>テウカス</sup>と<sup>テウカス</sup>云<sup>テウカス</sup>く<sup>テウカス</sup>真<sup>テウカス</sup>丈<sup>テウカス</sup>云<sup>テウカス</sup>半<sup>テウカス</sup>ハ<sup>テウカス</sup>陽<sup>テウカス</sup>敷<sup>テウカス</sup>之<sup>テウカス</sup>故<sup>テウカス</sup>を<sup>テウカス</sup>居<sup>テウカス</sup>る<sup>テウカス</sup>ハ<sup>テウカス</sup>用<sup>テウカス</sup>く<sup>テウカス</sup>と<sup>テウカス</sup>云<sup>テウカス</sup>く<sup>テウカス</sup>  
 陰<sup>テウカス</sup>敷<sup>テウカス</sup>之<sup>テウカス</sup>故<sup>テウカス</sup>ハ<sup>テウカス</sup>凶<sup>テウカス</sup>中<sup>テウカス</sup>ハ<sup>テウカス</sup>用<sup>テウカス</sup>之<sup>テウカス</sup>三<sup>テウカス</sup>光<sup>テウカス</sup>院<sup>テウカス</sup>の<sup>テウカス</sup>傳<sup>テウカス</sup>を<sup>テウカス</sup>用<sup>テウカス</sup>也<sup>テウカス</sup>

後醍醐天皇年  
中行事、肉御佛  
名のテ条かつ綿  
の事、何り衣もこの  
つてまらこを入てと  
あり  
明け綿ハ出物  
綿を踏るるん

雅亮装束抄三云  
うちみづりのてを  
わくわくおひなの  
らあ〜トアリ  
昔ハ〜もろもろ  
〜今ハ〜

一 廣ヒロぐさのるある 有ユウ織シヨクの人云 廣ヒロぐさハ衣モノ管コロモとて古代の

器也 上古衣を細ウツのモノ異モノく 茶チヤもて 衣モノもモノあり 古代ハ物モノ

簡カン易イと人ハ衣を踏ムる付ツキハ衣モノハ衣モノ管コロモのモノとて出デ

ける也 後ハ衣モノハ衣モノ管コロモとて出デる付ツキハ衣モノハ衣モノ管コロモとて出デ

一 赤アカ乱ラン茶チヤのモノ真サタ衡ヒラ云 赤アカ乱ラン茶チヤハ衣モノ管コロモのモノとて出デ

作りて赤アカ乱ラン箱ハコと云也 云々 うちみづるのモノとて出デ

里サトと云ハ 源氏物語繪合の書ナヒうちみづるのモノとて出デ

花ハナ智チ解ケ情セイ云 一条兼良 うちみづるのモノとて出デ

をけづる付ツキ赤アカ乱ラン茶チヤハ衣モノ管コロモのモノとて出デ

巾箱キンシヤウ盛シヤウ手テ巾キン之ノ器キ倍ヘイ日ニチ赤アカ乱ラン匣コ云 上古ハ手テのモノとて出デ

入イる物モノハ 唐木カラキ 藤フジ 橘キハチ 木キ 換カく 何ナニり

ゆきユキのモノ 汁カニ 坏ハイと書カキぐん水ミヅ入イるモノのモノ 形カタハ 茶チヤ 碗ワンのモノ 如カドク

木キとて作ウケのモノ 漆ウレシとてぬり 藤フジ 橘キハチ 木キ 換カく 何ナニり

を考カウるモノ あり 如カドクも 茶チヤ 碗ワンのモノ 如カドク 如カドクも 考カウるモノ あり

と對ツイするモノ 形カタハ 茶チヤ 碗ワンのモノ 基キ 此コノ 如カドク 但タ 茶チヤ 碗ワン のモノ 中ナカ 考カウるモノ あり

系ケイ 考カウるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり

基キ 別ベツ 考カウるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり

考カウるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり

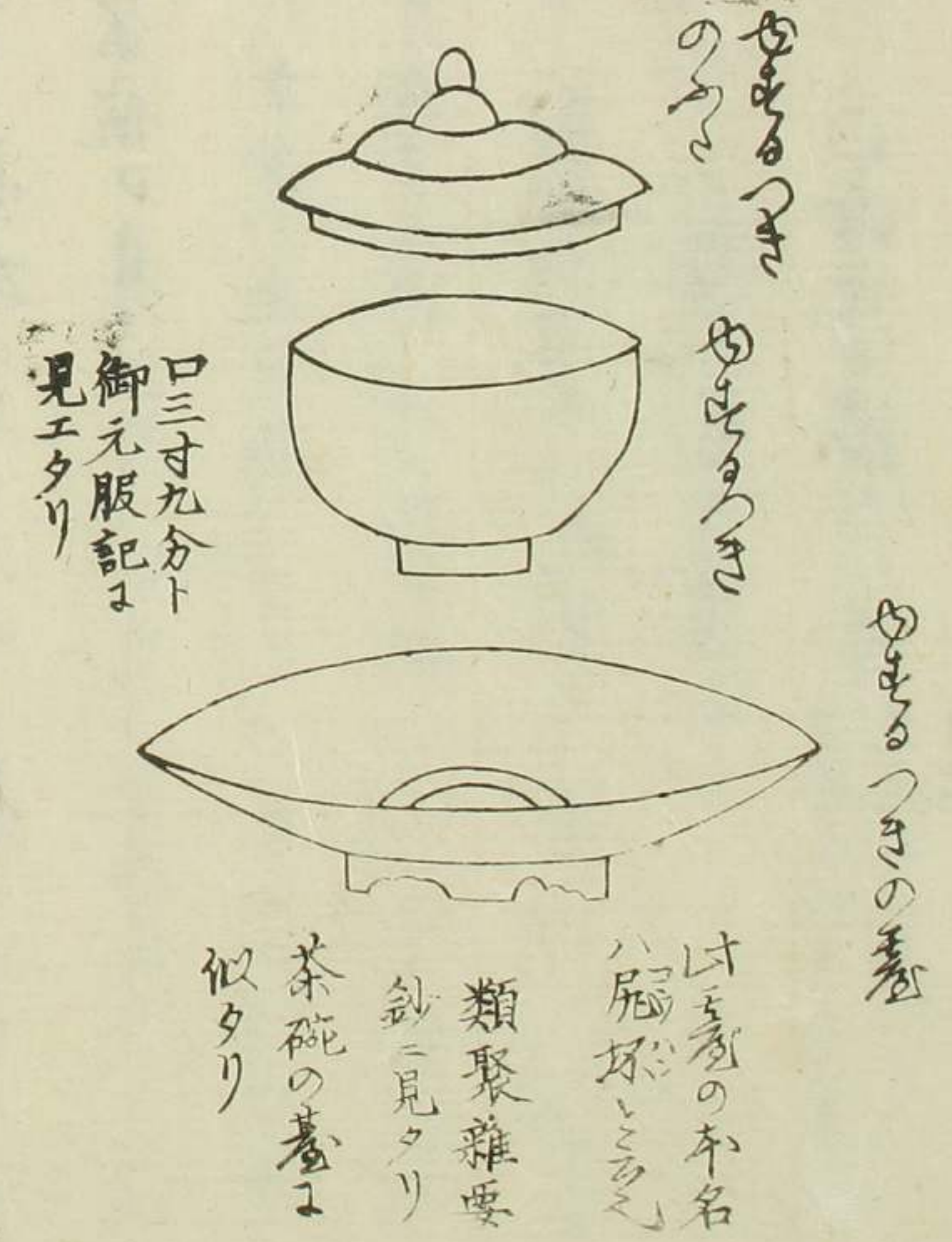
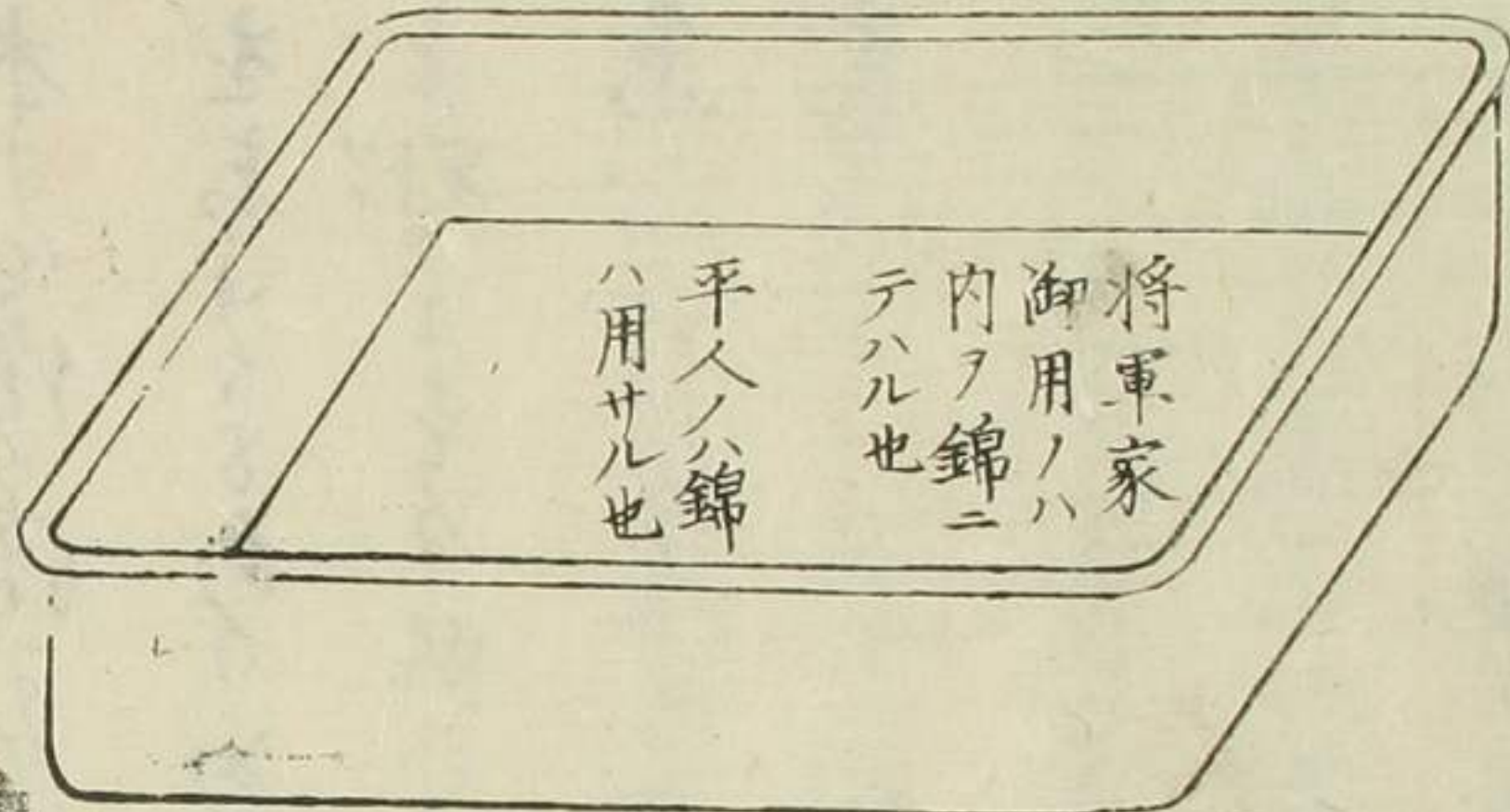
を踏ムるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり

○ 赤アカ 乱ラン 箱ハコ のモノ 如カドク 考カウるモノ あり 如カドク 考カウるモノ あり

雜記八

十七

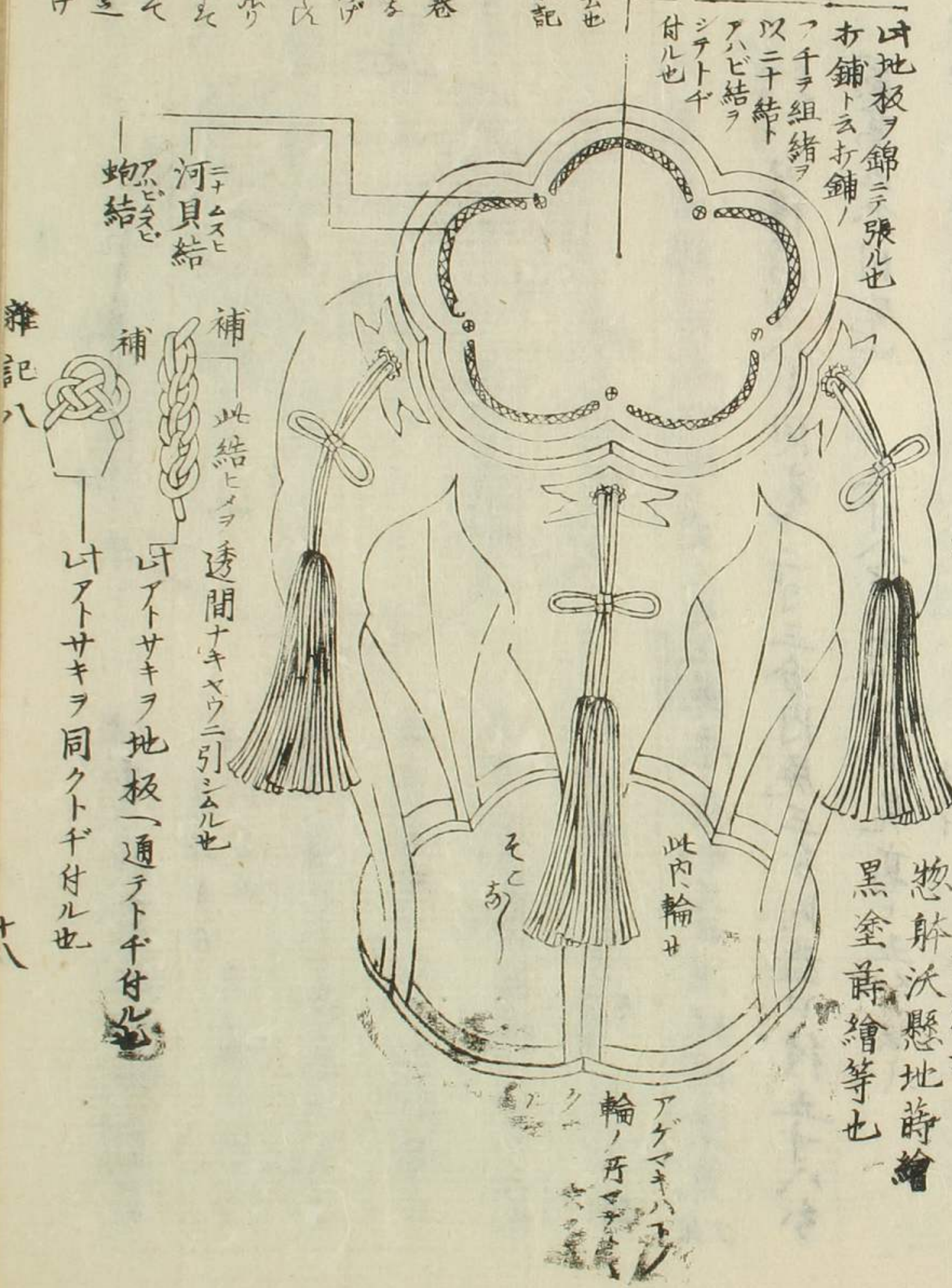
類聚雜用鈔ニ  
云抄乱管長一尺  
一寸五分弘九寸五  
分深四寸折角ヲ  
詩繪螺鈿口取  
錫ヲ置ク云々



うちみぐりの茶ハ茶箱のサ大キあるありて内ハ鑿貝を被ヒ  
鑿のホ乱と云々をあたむる尺貝を入ル故ホ乱の茶と云々元彼あど  
ハハミウケゴを用ふるホミぐりの茶のウケゴハホミぐりの茶のウケゴ  
ト云々あるも別ト云々

ゆきまのつきの下基

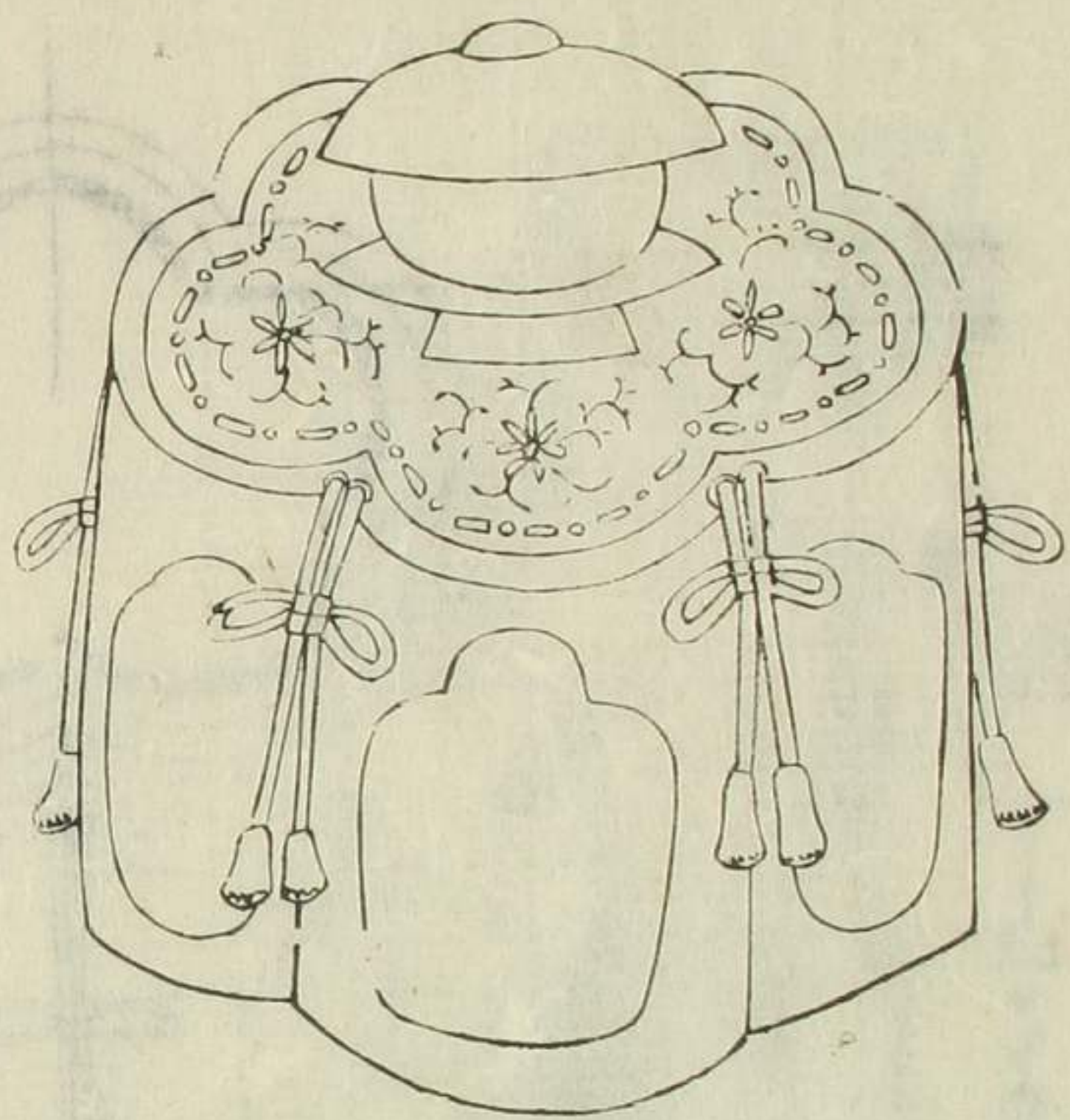
本名油坏ノ蓋ト云也  
面七寸三分ト元服記  
アリ  
油坏ノ蓋ハあげ巻  
を付多ク本式ハ  
物を付てなれあげ  
すきを付てハあげ  
蓋の上を錦ヲ張リ  
ハ端ノ組法長  
着の板ハあげ巻  
の條の余を是  
の方へ引出シあげ



雑記ハ

十八

卷を結ぶ織物を  
 板と云ふ身も大  
 計と小計とをせ  
 二を大計とせ  
 かくとせざるをに  
 と云小計は短くと  
 ちとせ物と云質  
 結ぶるが結のち包  
 清和と云くはす



此類聚雜要鈔云  
 清閑寺殿  
 の可也 其書云其  
 五葉角ヲ入ル足高サ七寸五  
 分内面厚サ六分土居厚サ  
 三分牙象腰同弘サ一寸六分  
 同手前長三寸自角定 面衣物

小文ノ唐錦同表卧組二丈三尺上卷五寸垂也又云泔坏銀塗黄ル金  
ヤサ白口徑四寸八分同高サ二寸三分内尻三分同蓋口徑五寸八分  
 同高五分内尻焼弘サ五寸八分高サ六分尻高サ五分云々  
 一 泔坏カハヒのまきと云ふゆきるハゆりまも也泔坏と書てゆきるハまきと

ゆきるハ云相ハ  
 エリスルト云一也  
 夫木抄ニ竊蓮法  
 師の教はあといそ  
 の若力とゆきる  
 五波のくく耳  
 まきとぬるくま  
 うま又赤長粒臣  
 五波のくく耳  
 のせり五波の中  
 うたは油の上

一 泔カハヒハ志ろと云ふ字之杯ツキハ志ろハ腕の形を云さるゆきと  
 云も酒杯と云志之ためゆきと云も高杯也泔泔ハ米を氷に入れて  
 ぬるをゆき米と米をまき合すと云ぬるゆきと云るゆきを略  
 志てゆきると云也米をとぎた白一番の白水をびんある用は  
 白水を入杯あるぬゆきと云と云之白水ハ性シヤウの毒ヒユ物之人の血ケツ  
 氣ハの不す物之のせ絶たれ眼メもくあり或ハ眼痛又ハ  
 髪カサの内ウチは毒を生むるゆゆる病をハゆきをよとすゆき  
 髪を結ふは白水を掃ウシ下せ髪をけば白くけつると髪を 白水ハ  
 心やま物なれハ也

一 たのり刀カタナと云ハカタナノユカタナカタナノヤキ  
 鋒を細く竹の子の形のみ赤也腰の物



江家次子云時給  
細桐竹鳳臺厨  
二厨云

の如く、東方は志のぎをまゝする小刀也、西方は志のまをまゝするハ  
鑿のそや、口をまゝ切らう、為之片志のぎ目、ハ、平口、ハ、成之  
一道具のうさう、ハ、あがいと云ふあり、うさ、ハ、金書之金泥、  
鑿指をまゝるを云、今、時給と云、指之金具と云、たゞ、あり、金  
と書、具のま、此、な、う、ま、少、ゆ、れ、る、金、書、を、あ、あ、い、と、云、河、可  
付、て、具、の、字、を、做、り、用、ひ、し、る、と、金、と、書、具、と、し、て、陰、指、出、し、る  
ハ、螺、鈿、と、云、之、れ、も、切、金、と、書、具、と、し、た、り、ゆ、り、し、る、を、俗、に  
金、具、と、云、ふ、あ、る、也、

権記云紫檀地螺  
鈿香炉相一合云

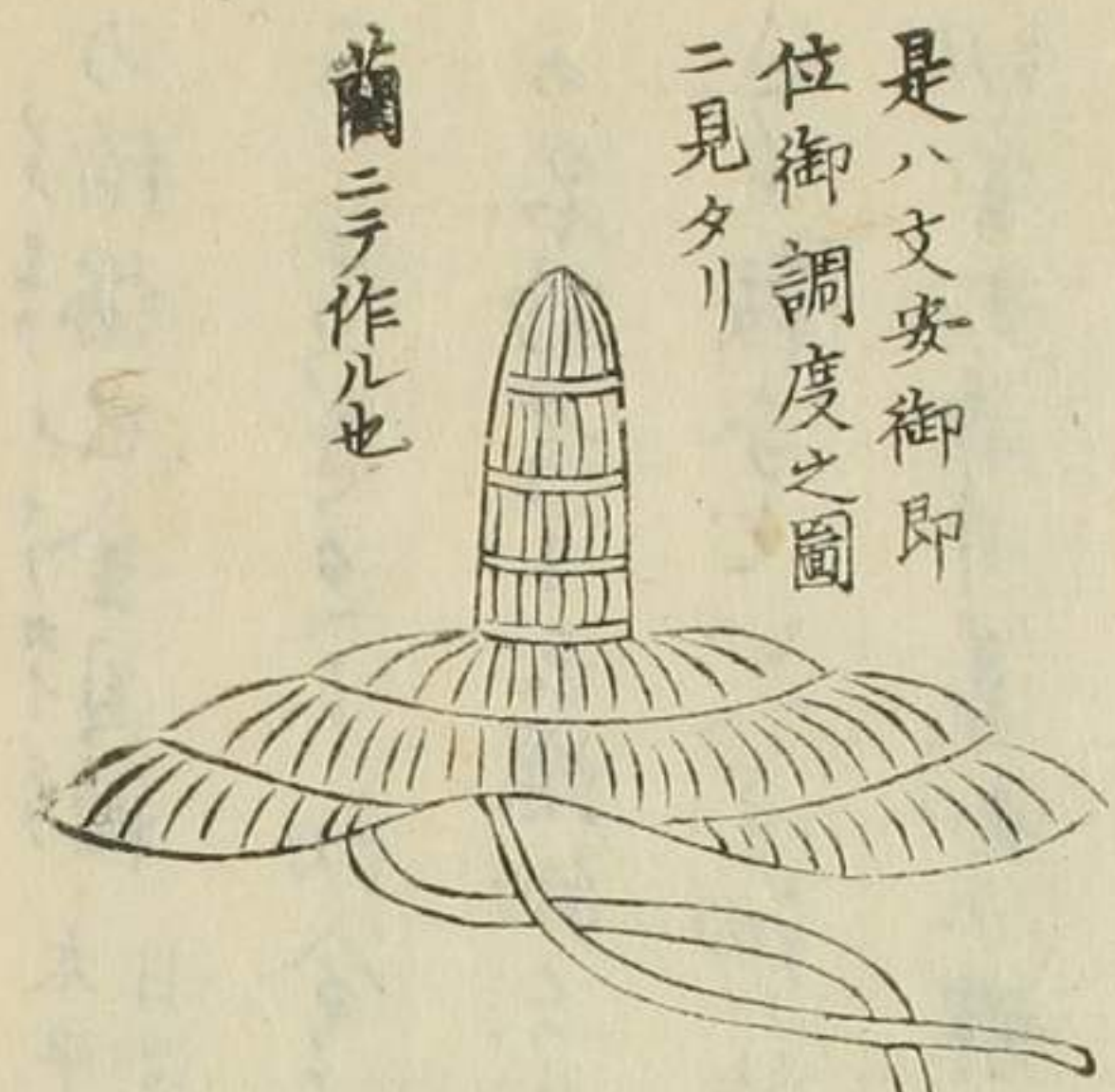
衣の袖口ヲラシを  
おし、う、多、栗、花、お  
傍、う、又、又、未、組  
ハ、ラ、シ、を、押、事、ハ、  
傍、抄、ハ、見、て、り

新野問答云足基  
御鏡、ハ、貝、ニ、成  
鈿、ハ、金、華、飾、ト、字  
注、ハ、貝、ハ、青、貝、ハ、  
鈿、切、金、ニ、云、

佛檀并柱等皆  
指貝云

の俗稱也、金具、鞍、  
ハ、あ、う、ま、る、一、切、金、と、書、具、と、し、て、飾、を、ま、る、あ、う、一、山、岡、後、明  
の、名、物、考、ハ、云、螺、鈿、今、俗、に、云、青、貝、の、る、も、古、き、物、ハ、貝、す、り  
と、書、鞍、と、い、へ、る、細、ハ、飾、也、と、云、之、れ、螺、鈿、の、本、儀、ハ、青、貝、と  
切、金、也、壺、井、義、知、云、螺、鈿、本、儀、ハ、金、ト、貝、ニ、テ、アル、ベ、ケ、レ、氏、皆、貝、斗  
ヲ、用、テ、螺、鈿、ト、云、例、也、云、一、鈿、ハ、玉、篇、三、曰、徒、練、切、金、花、也、又、鈿、字、彙  
云、金、華、飾、又、螺、鈿、云、一、  
一、香、盒、  
玳、瑁、ハ、唐、土、より、渡、る、物、之、形、ハ、似、る、物、甲、也、  
ど、う、也、の、甲、也、物、の、ど、う、ハ、成、格、あ、る、う、い、く、し、き、物、あ、る、べ

某種ふはらふより外用よき物ありて一名まらばんと云  
 女のさし拵クシのいさよな扇のうらうとて今用ありタイニイ飛瑠也  
 一あやのさしアマイカサ後蘭のさしと書てタミヲモテ表は織る蘭とて草を組む  
 是也今世のあささし之但今世あささしのあやのさしなり  
 ら以一名むどりさしと云又あやのさしと云園花のなり



是ハ文安御即位御調度之圖ニ見タリ  
 蘭ニテ作ル也

是ハ流備馬の時用るさしありめさしの  
 上を角のゆき高くししるふ子細あり  
 古の人の月代をさしす髪をさしむとて  
 さしハ頭のよきさしとてちやせん髪ふ  
 めひよりさしはさしをさしをさしをさし  
 是のよき角のゆきあり物をさしつけ  
 たさし冠の上の角れゆきあり物をさし  
 とのゆき中子もさしをさしをさしをさし  
 これも同意也

田樂ハ法師のなり髪ありて田樂の何れいさの上よりさしを  
 今用あり又田樂の舞ひおる故さしのよき風帯を付て舞  
 少時風帯れむめさしに風帯ありさしとて物あり  
 一あやのさし後三年の條よりさしをさしをさし



田樂法師のなり  
 あやのさしの  
 是ハ職人尽  
 歌合乃繪  
 見えり  
 風帯アリ



是も田樂法師のあやの  
 さしあり  
 是ハ南都の正倉院に  
 ありて田樂のさし  
 一躰むき  
 作りらるる青紙  
 さしあり  
 風帯黒ト紫ト黄  
 との草あり

アラツ、ラト云  
 一ハ歌ニモヨリ  
 田舎ノ詞ニハカ  
 トトツラト云也  
 カナトハカタツ  
 ヨキヲ云ナルベシト  
 ツラハツ、ラト云  
 マリナルヘシシラ  
 フヤトモ云

一 片<sup>ヒ</sup>ラ<sup>ヒ</sup>コ<sup>ヒ</sup>六<sup>ヒ</sup>つ<sup>ヒ</sup>楯<sup>ヒ</sup>也つ<sup>ヒ</sup>と云草の海<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>作<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>つ<sup>ヒ</sup>と<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>者<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>子<sup>ヒ</sup>  
 也つ<sup>ヒ</sup>ら<sup>ヒ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>川<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>た<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>丸<sup>ヒ</sup>揉<sup>ヒ</sup>す<sup>ヒ</sup>て<sup>ヒ</sup>ぬ<sup>ヒ</sup>き<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>て<sup>ヒ</sup>組<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>也  
 四方の角<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>ら<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>め<sup>ヒ</sup>一<sup>ヒ</sup>草<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>包<sup>ヒ</sup>む<sup>ヒ</sup>今<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>片<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>ら<sup>ヒ</sup>す<sup>ヒ</sup>  
 作<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>少<sup>ヒ</sup>一<sup>ヒ</sup>林<sup>ヒ</sup>籠<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>紙<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>て<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>又<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>楯<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>木<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>板<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>  
 作<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>残<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>張<sup>ヒ</sup>く<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>も<sup>ヒ</sup>多<sup>ヒ</sup>し<sup>ヒ</sup>

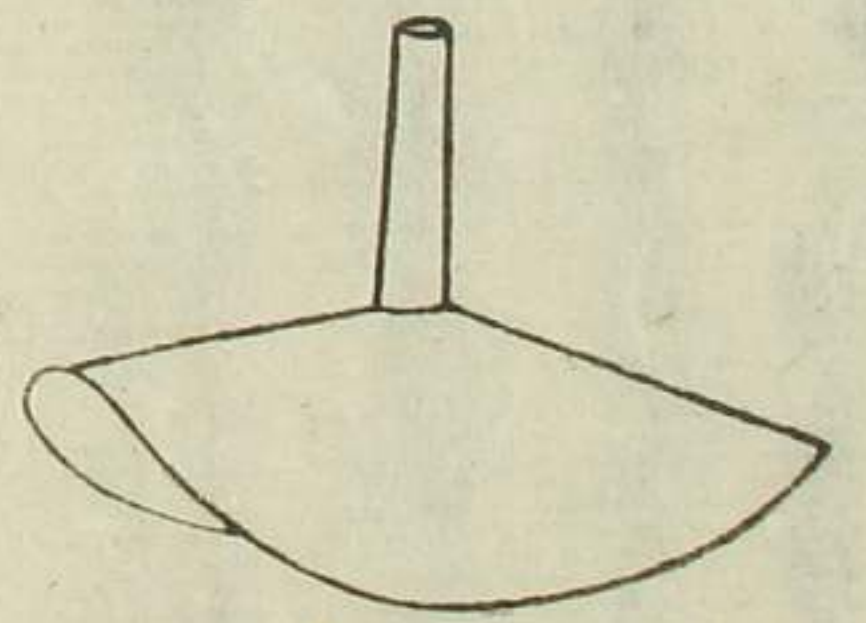


ま<sup>ヒ</sup>ぬ<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>ら<sup>ヒ</sup>す<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>物<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>ん<sup>ヒ</sup>あり

一 是<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>時<sup>ヒ</sup>軍<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>お<sup>ヒ</sup>ろ<sup>ヒ</sup>上<sup>ヒ</sup>洛<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>行<sup>ヒ</sup>列<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>死<sup>ヒ</sup>彈<sup>ヒ</sup>吉<sup>ヒ</sup>惟<sup>ヒ</sup>久<sup>ヒ</sup>と<sup>ヒ</sup>云<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>是<sup>ヒ</sup>也  
 物<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>ん<sup>ヒ</sup>あり



是<sup>ヒ</sup>圖<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>種<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>て<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>作<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>  
 一<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>ら<sup>ヒ</sup>す<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>物<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>ん<sup>ヒ</sup>あり



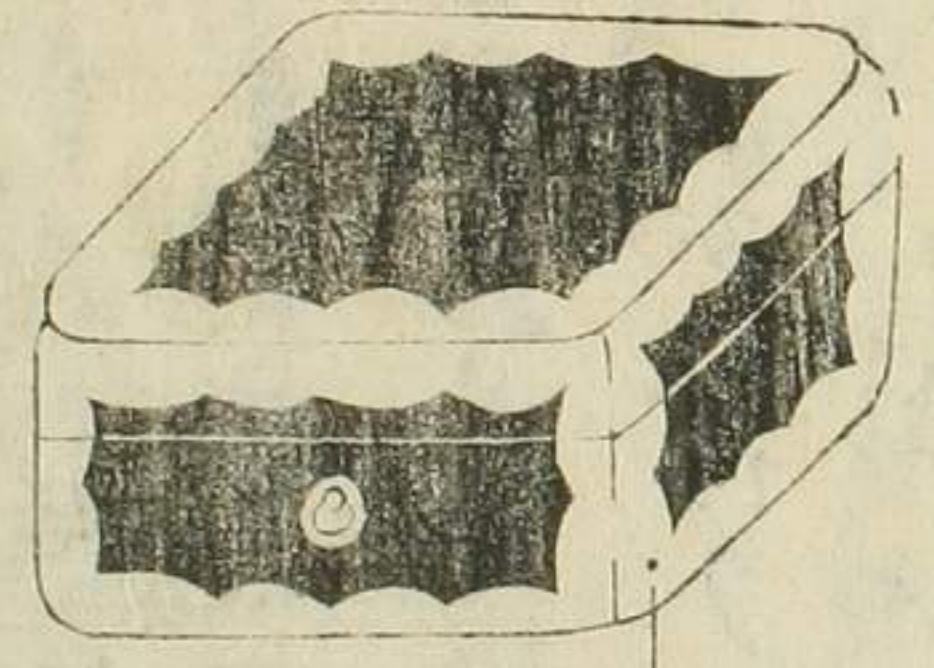
又<sup>ヒ</sup>此<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>ある<sup>ヒ</sup>  
 圖<sup>ヒ</sup>も<sup>ヒ</sup>あり<sup>ヒ</sup>  
 是<sup>ヒ</sup>ハ<sup>ヒ</sup>法<sup>ヒ</sup>  
 あり

義家お<sup>ヒ</sup>え<sup>ヒ</sup>げ<sup>ヒ</sup>一<sup>ヒ</sup>令<sup>ヒ</sup>ん<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>長<sup>ヒ</sup>編<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>一<sup>ヒ</sup>馬<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>む<sup>ヒ</sup>ら<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>  
 一<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>馬<sup>ヒ</sup>の<sup>ヒ</sup>あ<sup>ヒ</sup>り<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>ふ<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>ま<sup>ヒ</sup>ぬ<sup>ヒ</sup>ら<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>さ<sup>ヒ</sup>し<sup>ヒ</sup>ひ<sup>ヒ</sup>き<sup>ヒ</sup>る<sup>ヒ</sup>物<sup>ヒ</sup>は<sup>ヒ</sup>ん<sup>ヒ</sup>あり

書<sup>ヒ</sup>を<sup>ヒ</sup>り

一 大まこあるふまみあると云箱ありぬぐもまきびのりやまきく  
 してそれを朱うるも一とせぬうこ外のぬぐぬり符後をす  
 ると赤字の羅をきせて上の布目のこのぬぐぬる朱うるも一と  
 める冠あども上布目を見せぬるまぬもぬる也す法は婚  
 入道具之記あり形は子箱のこまくもせぬもこまふす  
 あつたは名書あり入る大すみ何うものもぬるの物合何を入る  
 とす定もぬ何うも心なす入る也子箱あども一入る  
 定あり大ふも小同あり大まこあるは入る子ふ又ハハハ  
 けらひ道具をを入る也大まこ赤ふす赤同神之此果古ハ  
 赤ふまの物入るもぬ今ハ婚の時のぬぐ物のもまきぬ

◎ まま何れ也

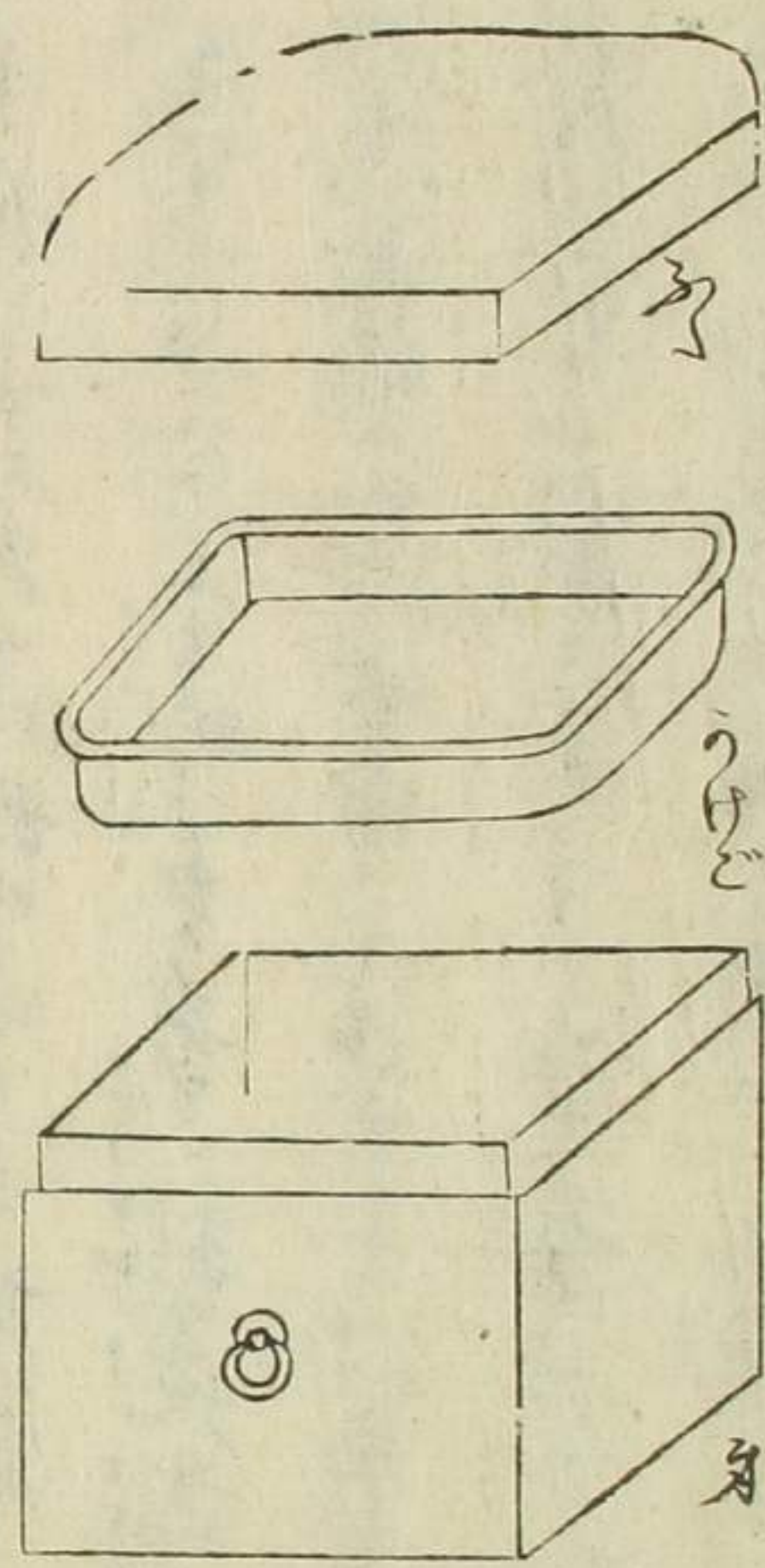


此角くを赤くぬる也

大鏡表七太政大臣  
 道長のおとと中界  
 それより内は箱入信  
 らんとし澄あまのま  
 こをす作らぬれまけ  
 せぬる刀にてまみぬ  
 明月記云寛喜二年  
 正月十五日後開行幸  
 被贈置物以錦蓮  
 厨子以紫深物蓮子  
 言二合置之

一 手箱ハすみある法形のごとく一 せのちうけごあり角くを丸み  
 を付てやのの上もぬぐぬりも一 梨子地蔀繪あどすも也寸法ホハ婚  
 入道具記は有り古常は手箱を何れも入て置くるぬぐ  
 入物定あり物も今もぬて赤ふ用白人有く婚の時のぬぐり物  
 はのまも也手箱を草まて作り一も有り明月記云天福二  
 年八月十九日御憾法衛府四人修理大貳兵衛資雅在引物

カワゴノテハコ  
皮子手箱入檀紙云々手箱の圖左のごとく



手箱今の世のいふや  
らぬ物と後はいふや  
人もなきやと云へ

一 三線と云物古いあき物之近代琉球國より渡りたる云々本を  
ガタリニヤチヨ  
存の女あどのひく事まで常の女あどのもてあそぶいふや  
半は人のやる由古光の物語也近き比ハ大名高家の息女の藝  
とあり諸侍の中もモラフ脱ぶ入り有り  
一 琴琵琶あどの糸をうくる枕をバマクラこゆとハいふやちうと云々

檀の字を書き置まハちうとテスミ云琵琶ハちうと  
リニコ云又琴ハ  
ちとも云ことちと云々

一 男比びんぐとをびんぐと云女のびんぐとをびんぐと  
といふ婿入記は見たり今ハ此見ふもあ

一 海のをとひは角を付るハ手あつた可も衣服をおさへんあ  
志書書云々云云んどうたろひの角ハ二ツ何ハイセウ衣装をおさへ  
させんの存也云々まんざうたろひハハつのひの中ハ伊勢加賀

真助返着云云手あどのけやろ中畧たろひのつ孔袴のひさ  
むく云々

一 あらぬちのち 光原院殿代天文年中將軍家正月めさる

萬教書条ニ云序  
殿の事伊勢守毎  
月御進仕白進ら  
れ申し香具ヲ  
ハ進せしめ袋ナリ  
進スル也

法服の目錄上畧 法衣やけんゆのこはあふくろと何れ此あ  
あふくと云ぬのハ香の具を入る袋のるこ沃巽阿う是書云  
法何ふくろと戸ハまじぬのまじりさを四くくまをううてそを  
何せいつるあもしくは祈りくをまておくるおまといふあはぬひ  
くくゆむきあふくろある物といふ今ハ寸法も知るるんる者も  
すれといれ云く年中恒例記云此あふ袋正月の法服ニ乗ハ寸伊  
勢も潤進ニ由也袋ハコセイカウ 紅精好 緒ハ白キ子リグリノ四打  
也云く今の白袋と云按之 伊勢より 潤進の時ハ香具をハのれがー  
袋けりく香具ハ典業より潤進何の袋  
一柄笠と日記あるハゆうのさよむへ柄の字をゆうよむん  
朱柄笠とあり朱ゆうのさよむへ朱色の笠よむん

目録ニ朱柄笠紙を朱まてぬる之柄を朱まてぬるよりある也

一装束の傘 セウブツ カラサ 装束ヲ着スル時 持スル也白袋ヲ入 廣サ八尺を本とする也弓持て馬に

乗る時弓のあはぬ色ぬわどふまぬぬはて此より鎌倉年中  
行事を見えたり

一長柄の傘ハ貴人乗る上の時さうけりある柄を長くしる物也  
主人の供の時ハ馬上でも八尺傘を自身にさす之日記云んる

一 日傘のる萬教書条云く王公方格日傘より柄ハ黒漆小骨同  
紙ハ朱紙より紙ハ白 角ハ常ノ大名ハ柄ハ黒漆小骨黒紙  
黒ハ表紙朱紙也角ハ常ノ供元番方近ク柄ハ黒漆小骨同  
小骨黒紙紙黒ハ裏紙黄紙也角ハ常ノ柄ハ何れも竹骨


雜記云日記を  
二ツカサの字右  
之は日傘の字  
とさうして丸雨傘  
と風雨の時ハる  
よりハ丸雨傘より  
字ナリ  
桑川記云くはまの

事勢あるべきの時  
すん妻人ホ供<sup>ニ</sup>時  
八指<sup>ノ</sup>指<sup>ハ</sup>指<sup>ハ</sup>  
籍<sup>ハ</sup>記<sup>ニ</sup>馬<sup>上</sup>上<sup>リ</sup>ん<sup>カ</sup>  
さ<sup>ニ</sup>指<sup>テ</sup>了<sup>ル</sup>て<sup>キ</sup>ず  
一<sup>ノ</sup>目<sup>通</sup>柄<sup>を</sup>を  
一<sup>ノ</sup>己<sup>に</sup>し<sup>め</sup>れ<sup>て</sup>も  
右<sup>ニ</sup>て<sup>キ</sup>ず<sup>キ</sup>も<sup>も</sup>  
日<sup>の</sup>影<sup>を</sup>も<sup>も</sup>同<sup>く</sup>なる  
一<sup>ニ</sup>一  
幸<sup>中</sup>秘<sup>伝</sup>大<sup>名</sup>也<sup>成</sup>記  
云<sup>ハ</sup>此<sup>は</sup>世<sup>に</sup>馬<sup>上</sup>上<sup>ニ</sup>昔<sup>々</sup>  
然<sup>り</sup>う<sup>ろ</sup>不<sup>の</sup>附<sup>の</sup>老<sup>の</sup>  
八<sup>尺</sup>差<sup>の</sup>柄<sup>も</sup>り<sup>き</sup>  
是<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>き</sup>も  
の<sup>を</sup>り<sup>さ</sup>や<sup>の</sup>柄<sup>ハ</sup>  
少<sup>細</sup>め<sup>の</sup>差<sup>も</sup>い<sup>ひ</sup>  
ら<sup>い</sup>く<sup>く</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>ん</sup>  
が<sup>に</sup>美<sup>也</sup>

葉<sup>二</sup>兼<sup>一</sup>  
足<sup>之</sup>部<sup>ニ</sup>柄<sup>立</sup>袋<sup>ト</sup>  
一<sup>リ</sup>同<sup>或</sup>本<sup>ノ</sup>朱<sup>書</sup>  
二<sup>馬</sup>上<sup>乗</sup>用<sup>ル</sup>時<sup>傘</sup>  
ノ<sup>柄</sup>立<sup>ル</sup>袋<sup>也</sup>  
光<sup>大</sup>日<sup>射</sup>手<sup>方</sup>圓<sup>書</sup>  
二<sup>云</sup>馬<sup>上</sup>上<sup>リ</sup>ん<sup>カ</sup>  
さ<sup>ニ</sup>指<sup>テ</sup>了<sup>ル</sup>て<sup>キ</sup>ず  
右<sup>ニ</sup>て<sup>キ</sup>ず<sup>キ</sup>も<sup>も</sup>  
日<sup>の</sup>影<sup>を</sup>も<sup>も</sup>同<sup>く</sup>なる  
一<sup>ニ</sup>一  
幸<sup>中</sup>秘<sup>伝</sup>大<sup>名</sup>也<sup>成</sup>記  
云<sup>ハ</sup>此<sup>は</sup>世<sup>に</sup>馬<sup>上</sup>上<sup>ニ</sup>昔<sup>々</sup>  
然<sup>り</sup>う<sup>ろ</sup>不<sup>の</sup>附<sup>の</sup>老<sup>の</sup>  
八<sup>尺</sup>差<sup>の</sup>柄<sup>も</sup>り<sup>き</sup>  
是<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>き</sup>も  
の<sup>を</sup>り<sup>さ</sup>や<sup>の</sup>柄<sup>ハ</sup>  
少<sup>細</sup>め<sup>の</sup>差<sup>も</sup>い<sup>ひ</sup>  
ら<sup>い</sup>く<sup>く</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>ん</sup>  
が<sup>に</sup>美<sup>也</sup>

私<sup>ノ</sup>刀<sup>記</sup>云<sup>ハ</sup>甚<sup>各</sup>々<sup>と</sup>い<sup>ハ</sup>か<sup>き</sup>を<sup>バ</sup>墨<sup>ク</sup>く<sup>と</sup>常<sup>々</sup>も<sup>い</sup>ひ<sup>又</sup>日<sup>の</sup>影<sup>も</sup>  
中<sup>事</sup>も<sup>そ</sup>は<sup>次</sup>公<sup>方</sup>様<sup>の</sup>に<sup>用</sup>の<sup>儀</sup>也<sup>是</sup>日<sup>の</sup>影<sup>も</sup>と<sup>い</sup>ひ<sup>私</sup>の<sup>紙</sup>  
墨<sup>を</sup>さ<sup>し</sup>て<sup>用</sup>ひ<sup>公</sup>方<sup>様</sup>の<sup>朱</sup>を<sup>さ</sup>ら<sup>さ</sup>れ<sup>い</sup>る<sup>も</sup>柄<sup>も</sup>お<sup>替</sup>  
し<sup>れ</sup>蜻<sup>川</sup>記<sup>云</sup>主人<sup>に</sup>う<sup>さ</sup>は<sup>り</sup>一<sup>ノ</sup>ノ<sup>事</sup>公<sup>方</sup>様<sup>一</sup>も<sup>雨</sup>  
降<sup>ハ</sup>ハ<sup>傾</sup>儀<sup>の</sup>危<sup>ゆ</sup>さ<sup>リ</sup>也<sup>是</sup>日<sup>の</sup>影<sup>も</sup>と<sup>い</sup>ひ<sup>小</sup>者<sup>さ</sup>と<sup>い</sup>ひ<sup>管</sup>領<sup>ハ</sup>  
る<sup>降</sup>ハ<sup>小</sup>者<sup>さ</sup>と<sup>い</sup>ハ<sup>日</sup>の<sup>影</sup>ハ<sup>馬</sup>廻<sup>流</sup>さ<sup>ル</sup>馬<sup>上</sup>一<sup>も</sup>同<sup>く</sup>  
卷<sup>本</sup>の<sup>所</sup>成<sup>記</sup>云<sup>ハ</sup>供<sup>の時</sup>も<sup>上</sup>まで<sup>の</sup>影<sup>ハ</sup>八<sup>尺</sup>う<sup>さ</sup>を<sup>用</sup>ず<sup>朱</sup>  
を<sup>め</sup>常<sup>々</sup>さ<sup>し</sup>山<sup>平</sup>人<sup>に</sup>う<sup>さ</sup>し<sup>朱</sup>を<sup>さ</sup>ら<sup>さ</sup>れ<sup>い</sup>る<sup>も</sup>柄<sup>も</sup>お<sup>替</sup>  
一<sup>ノ</sup>か<sup>の</sup>子<sup>の</sup>柄<sup>立</sup>の<sup>影</sup>成<sup>流</sup>才<sup>は</sup>さ<sup>る</sup>降<sup>ハ</sup>ハ<sup>手</sup>持<sup>あり</sup>ん<sup>カ</sup>  
を<sup>さ</sup>ら<sup>さ</sup>れ<sup>い</sup>る<sup>も</sup>柄<sup>も</sup>お<sup>替</sup>  
三<sup>儀</sup>一<sup>流</sup>云<sup>ハ</sup>馬<sup>上</sup>上<sup>リ</sup>ん<sup>カ</sup>  
の<sup>影</sup>も<sup>も</sup>同<sup>く</sup>なる  
一<sup>ニ</sup>一  
幸<sup>中</sup>秘<sup>伝</sup>大<sup>名</sup>也<sup>成</sup>記  
云<sup>ハ</sup>此<sup>は</sup>世<sup>に</sup>馬<sup>上</sup>上<sup>ニ</sup>昔<sup>々</sup>  
然<sup>り</sup>う<sup>ろ</sup>不<sup>の</sup>附<sup>の</sup>老<sup>の</sup>  
八<sup>尺</sup>差<sup>の</sup>柄<sup>も</sup>り<sup>き</sup>  
是<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>き</sup>も  
の<sup>を</sup>り<sup>さ</sup>や<sup>の</sup>柄<sup>ハ</sup>  
少<sup>細</sup>め<sup>の</sup>差<sup>も</sup>い<sup>ひ</sup>  
ら<sup>い</sup>く<sup>く</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>ん</sup>  
が<sup>に</sup>美<sup>也</sup>

臣<sup>下</sup>の<sup>影</sup>も<sup>も</sup>同<sup>く</sup>なる  
一<sup>ニ</sup>一  
幸<sup>中</sup>秘<sup>伝</sup>大<sup>名</sup>也<sup>成</sup>記  
云<sup>ハ</sup>此<sup>は</sup>世<sup>に</sup>馬<sup>上</sup>上<sup>ニ</sup>昔<sup>々</sup>  
然<sup>り</sup>う<sup>ろ</sup>不<sup>の</sup>附<sup>の</sup>老<sup>の</sup>  
八<sup>尺</sup>差<sup>の</sup>柄<sup>も</sup>り<sup>き</sup>  
是<sup>ハ</sup>一<sup>ノ</sup>に<sup>は</sup>い<sup>き</sup>も  
の<sup>を</sup>り<sup>さ</sup>や<sup>の</sup>柄<sup>ハ</sup>  
少<sup>細</sup>め<sup>の</sup>差<sup>も</sup>い<sup>ひ</sup>  
ら<sup>い</sup>く<sup>く</sup>一<sup>ノ</sup>と<sup>ん</sup>  
が<sup>に</sup>美<sup>也</sup>

四つ角のしんしん或人  
滑草ノ柄を長ク作り  
シヲ見タリキ貞丈翁  
ノ云レテ法ヨリ大キ  
シハ方丈ルルギヤウニ  
思ハル也因如左  
  
四寸大四寸小なり

秘夜長物語云後  
福川院の御時西山  
の暗西上人かの童  
桃灯は螢を入て光  
まり  
光源院殿三好苑前  
寺平に御成之記桃  
灯事事見エタリ是  
毛籠桃灯ナレバ

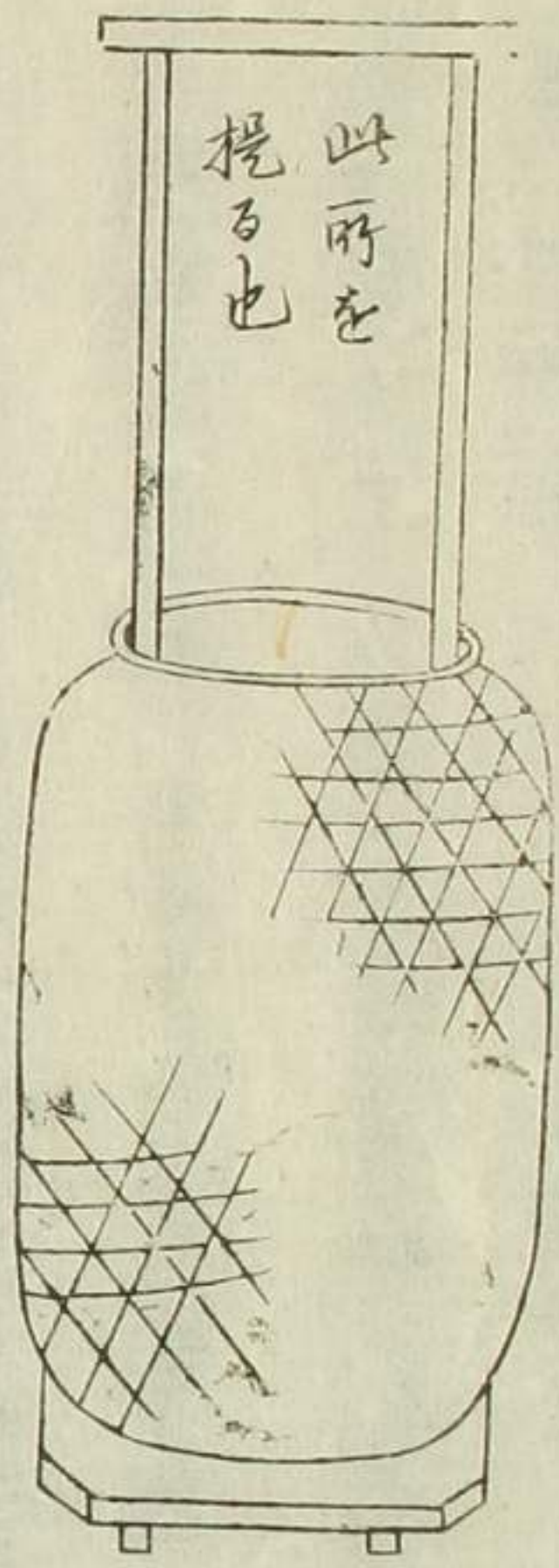
一 <sup>タテカサ</sup>立傘としてつうろを馬寄袋に入れ <sup>チイカサ</sup>基笠とて <sup>キカサ</sup>笠を馬袋に入れ  
持を付て持せる <sup>ホリ</sup>幸南世武家の風俗也古ハあきる也 <sup>シロカサ</sup>基笠立  
傘と云名目古記又 <sup>ニロカサ</sup>古ハ式正の耐白傘代衣を指也 <sup>シロカサ</sup>又  
浅黄の袋に入持せしあり笠ハあやめ笠を用是ハ <sup>シロカサ</sup>あやめ笠  
耐 <sup>シロカサ</sup>あやめ持せし <sup>シロカサ</sup>あやめ <sup>シロカサ</sup>基笠立傘と <sup>シロカサ</sup>あやめ <sup>シロカサ</sup>あやめ  
と思ふるも <sup>シロカサ</sup>あやめ <sup>シロカサ</sup>あやめ <sup>シロカサ</sup>断之也

一 <sup>チカサ</sup>手笠のり貞孝答書云此供元手笠のり <sup>チカサ</sup>走元の手笠  
のきをすうためて <sup>チカサ</sup>手笠 <sup>チカサ</sup>たのす <sup>チカサ</sup>うろ <sup>チカサ</sup>その <sup>チカサ</sup>手笠 <sup>チカサ</sup>白  
く柄ハ木也のき <sup>チカサ</sup>むむ <sup>チカサ</sup>之 <sup>チカサ</sup>急 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>し <sup>チカサ</sup>き <sup>チカサ</sup>と <sup>チカサ</sup>ろ <sup>チカサ</sup>く <sup>チカサ</sup>海 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>あ <sup>チカサ</sup>ひ <sup>チカサ</sup>は <sup>チカサ</sup>さ <sup>チカサ</sup>さ <sup>チカサ</sup>み <sup>チカサ</sup>め  
あ <sup>チカサ</sup>一 <sup>チカサ</sup>法 <sup>チカサ</sup>洪 <sup>チカサ</sup>元 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>手 <sup>チカサ</sup>笠 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>布 <sup>チカサ</sup>指 <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>馬 <sup>チカサ</sup>く <sup>チカサ</sup>ぬ <sup>チカサ</sup>り <sup>チカサ</sup>て <sup>チカサ</sup>米 <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>さ <sup>チカサ</sup>す <sup>チカサ</sup>常 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>八 <sup>チカサ</sup>尺

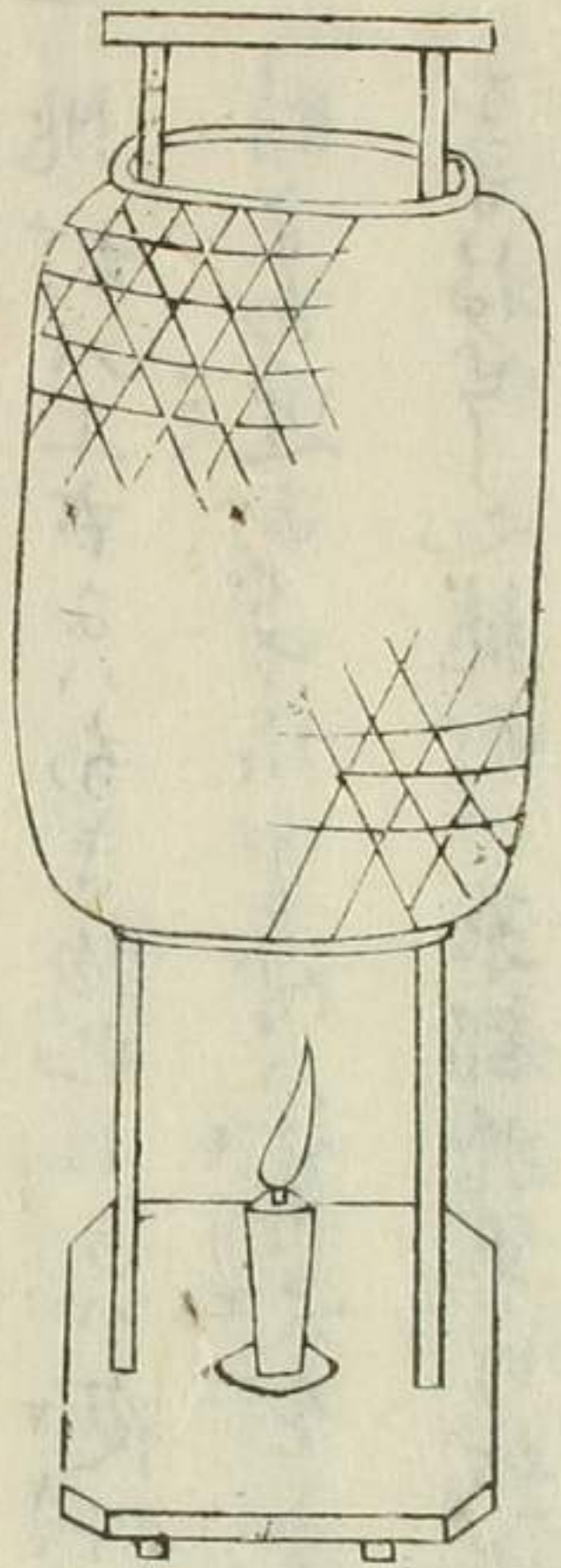
笠のちひさき物也と云 <sup>チカサ</sup>此 <sup>チカサ</sup>傘 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>馬 <sup>チカサ</sup>上 <sup>チカサ</sup>り <sup>チカサ</sup>て <sup>チカサ</sup>あ <sup>チカサ</sup>き <sup>チカサ</sup>と <sup>チカサ</sup>き <sup>チカサ</sup>と <sup>チカサ</sup>す <sup>チカサ</sup>也 <sup>チカサ</sup>也  
馬上此時ハ八尺がさあり <sup>チカサ</sup>糸 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>糸 <sup>チカサ</sup>と <sup>チカサ</sup>見 <sup>チカサ</sup>合 <sup>チカサ</sup>べ <sup>チカサ</sup>ー  
挑灯ハ上古ハ <sup>チカサ</sup>あ <sup>チカサ</sup>き <sup>チカサ</sup>物 <sup>チカサ</sup>也 <sup>チカサ</sup>上 <sup>チカサ</sup>古 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>夜 <sup>チカサ</sup>行 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>松 <sup>チカサ</sup>明 <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>用 <sup>チカサ</sup>又 <sup>チカサ</sup>容 <sup>チカサ</sup>来 <sup>チカサ</sup>此  
時 <sup>チカサ</sup>も <sup>チカサ</sup>近 <sup>チカサ</sup>あ <sup>チカサ</sup>ど <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>指 <sup>チカサ</sup>あ <sup>チカサ</sup>耐 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>篝 <sup>チカサ</sup>火 <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>さ <sup>チカサ</sup>き <sup>チカサ</sup>也 <sup>チカサ</sup>又 <sup>チカサ</sup>夜 <sup>チカサ</sup>行 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>耐 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>行 <sup>チカサ</sup>燈  
をも <sup>チカサ</sup>持 <sup>チカサ</sup>せ <sup>チカサ</sup>之 <sup>チカサ</sup>挑 <sup>チカサ</sup>灯 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>京 <sup>チカサ</sup>都 <sup>チカサ</sup>将 <sup>チカサ</sup>軍 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>代 <sup>チカサ</sup>末 <sup>チカサ</sup>法 <sup>チカサ</sup>々 <sup>チカサ</sup>不 <sup>チカサ</sup>用 <sup>チカサ</sup>始 <sup>チカサ</sup>也 <sup>チカサ</sup>也 <sup>チカサ</sup>一 <sup>チカサ</sup>桃  
川記又云 <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>や <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>ん <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>む <sup>チカサ</sup>ど <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>や <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>ん <sup>チカサ</sup>布 <sup>チカサ</sup>之 <sup>チカサ</sup>平 <sup>チカサ</sup>生 <sup>チカサ</sup>持 <sup>チカサ</sup>挑 <sup>チカサ</sup>灯 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>こ <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>ろ  
と <sup>チカサ</sup>い <sup>チカサ</sup>ゆ <sup>チカサ</sup>云 <sup>チカサ</sup>け <sup>チカサ</sup>か <sup>チカサ</sup>こ <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>や <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>ん <sup>チカサ</sup>と <sup>チカサ</sup>云 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>丸 <sup>チカサ</sup>く <sup>チカサ</sup>籠 <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>作 <sup>チカサ</sup>り <sup>チカサ</sup>て <sup>チカサ</sup>紙 <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>さ <sup>チカサ</sup>り  
たる物 <sup>チカサ</sup>あ <sup>チカサ</sup>る <sup>チカサ</sup>一 <sup>チカサ</sup>平 <sup>チカサ</sup>生 <sup>チカサ</sup>持 <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>や <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>ん <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>今 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>世 <sup>チカサ</sup>も <sup>チカサ</sup>用 <sup>チカサ</sup>る <sup>チカサ</sup>通 <sup>チカサ</sup>り  
の <sup>チカサ</sup>た <sup>チカサ</sup>も <sup>チカサ</sup>持 <sup>チカサ</sup>又 <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>や <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>ん <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>云 <sup>チカサ</sup>あ <sup>チカサ</sup>る <sup>チカサ</sup>一 <sup>チカサ</sup>こ <sup>チカサ</sup>ち <sup>チカサ</sup>ろ <sup>チカサ</sup>と <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>あ <sup>チカサ</sup>ま <sup>チカサ</sup>之 <sup>チカサ</sup>古 <sup>チカサ</sup>き <sup>チカサ</sup>詞 <sup>チカサ</sup>也  
ハ <sup>チカサ</sup>本 <sup>チカサ</sup>武 <sup>チカサ</sup>の <sup>チカサ</sup>る <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>略 <sup>チカサ</sup>し <sup>チカサ</sup>て <sup>チカサ</sup>耐 <sup>チカサ</sup>ハ <sup>チカサ</sup>他 <sup>チカサ</sup>へ <sup>チカサ</sup>便 <sup>チカサ</sup>宜 <sup>チカサ</sup>き <sup>チカサ</sup>指 <sup>チカサ</sup>は <sup>チカサ</sup>ま <sup>チカサ</sup>る <sup>チカサ</sup>を <sup>チカサ</sup>故 <sup>チカサ</sup>実 <sup>チカサ</sup>と <sup>チカサ</sup>い <sup>チカサ</sup>ひ



昔の例旧記より多し籠挑灯此圖元の如し



併せて籠を組んで紙を  
まろ油を引出す



燈をさす可き箱  
を上へあくる也

今も出羽國の驛エキにて是を用由奥州信州あとの驛エキも用由見よる人ヒト繪馬エウマに守りて予よんせあり

一行燈イッギョウテウの事古く夜道を引く時持り燈トモヒ也されバゆくとりびと

鎌倉年中行事又鎌倉殿足利殿の正月吾管領の如く

あひり列を記して續松ツギマツ二丁行燈イッマウ一ツありせしと有り續松

たのまの也行燈イッギョウテウの今の世にて用白あんどん也たよんせとあり

どんトウハ昔ハ東道トウは持あまし甘あよとがす物モノハあましノ物モノハ

燈トウ臺ダイを引ヒキるも古風也又燭臺ショウダイをも用也モトメ

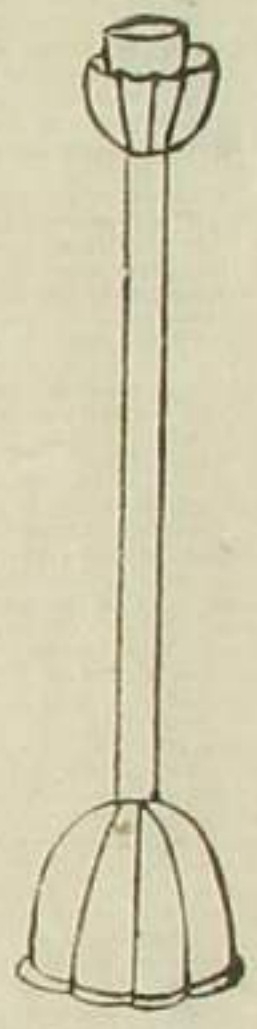
一燈臺トウダイハ木キにて作りしものも白木シロキもあり之形ハ燭臺ショウダイの如

く也但油盤アブラヤシを置く所と下の臺ダイの形カタありてさうも

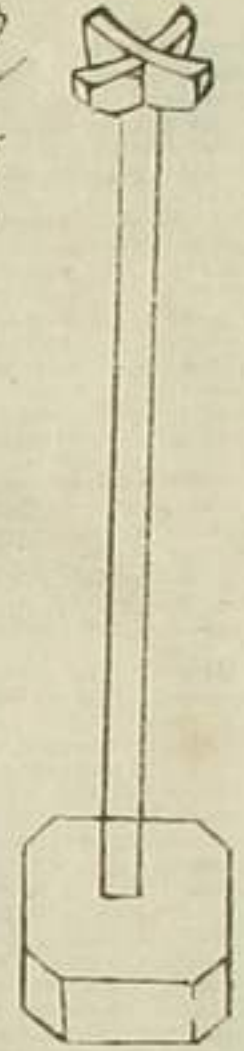
高タカふも多し糸イトハ少オホ書カキふみえあり燈臺トウダイハ油火アブラヒをとるす之燈

臺ダイハ本式也燭臺ショウダイハ畧儀リョウギ之らうとハ略儀也燈臺トウダイ畧儀リョウギ也

元文大嘗會繪卷  
物六足ノ張り繩  
ナシナキヲ本ト  
スベシ張繩ナク  
テモ例ナリト  
ト也



菊燈臺 上下とも菊の花の形

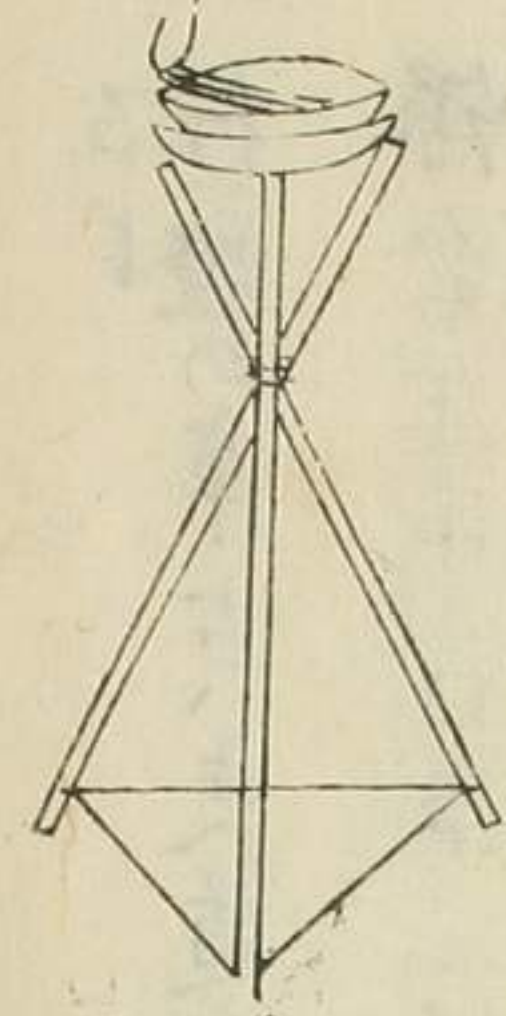


切燈臺 白木にて上ハハコノ形にて下蓋ハ四方ハコノ形をとる所法也見

一 短檠と云ハ燈臺の短きを云ハ長きをハ長檠と云惣名をハ檠檠と云燈臺の事

一 むまび燈臺の事ハ禁中にて公事公事ハ華飾の事ハ御中

を行ハ可ツカサ所ツカサの座の形と云ハ檠檠之細く丸く削ツカサたり木を立鼓立鼓の如く立てて上ハハコノ形を置いて油を入れ火をともす也 繪巻丸の如し



結燈臺寸法柱の長サ二尺五寸五分ハ口丸ノ徑上ニテ四寸下ニテ六寸又ハ上ニテ四寸半下ニテ六寸半ニモスル也是ノ間一尺八寸程マ也

柱三本柳ノ枝白木

麻繩太サ三ツグリ是程也



此間四寸三分

此繩二重廻シ結也三本ノ柱ヲユルク結置テ立ル時右ノダグリニ順ニ子ナリナリ

此下六分 男結ナリ 結止ハ栴 三ツ切也

一 脂燭の事はハ座敷の上にてとむすたり也これを書き

めいとも云也松明と書也婚禮ムカハの如く女房杭トシヒを

さして迎ムカハは出りも此脂燭を用ふ也禁裏トシヒにて天子夜の御所

は左の方へ立りて右の方へ立りて左の方へ立りて右の方へ立りて

立りて右の方へ立りて左の方へ立りて右の方へ立りて左の方へ立りて

此物也ヨク火モユルナリ  
ト見ナリ是松ノヒトナ  
明ハ松ノ脂有ル者也  
軍防金ノ着解ニ松  
ノ脂ヲ用フ也

紙屋紙の紙を川  
 へてスキ出ス紙也ス  
 キ返シ紙也色ウス  
 黒シ今ハ無之故ナ  
 源ヲウケテ三ノ角  
 二ノ角也

削て先の方を炭火にてあぶりてまぐ焦す也焼て炭はまぐハ惡  
 一はち油を引あがりてまぐ一紙紙を紙を廣サ五斗斗は  
 裁て脂燭の布を布巻まぐ之脂の字あがりてまぐ字あり  
 松の木あがりてまぐ紙火と名も古書ハ皆脂燭の字を用う  
 又本を紙にてまぐまぐたのう紙燭も書之脂の字を用う  
 元文の天子攝町院の大嘗會を行ひのひ一斗用う紙一脂燭  
 を或人武志小治殿へあがりてまぐ受まぐをん一はち未  
 松の木を用う紙一斗用う紙神の楮松右のぬ一まぐの圖也  
 長サ一尺五寸ホド丸シ

櫃三分程  
 先ヲ平ニ切ル  
 本ノ方ヨリ  
 マホッキ心ニ

先を二寸幅あがりてまぐ  
 油をぬりて又あがりてまぐ  
 松のヒデを用ひてまぐ

紙屋紙一斗  
 まぐハ書教  
 十斗書まぐ

はち三寸程  
 小口徑三分  
 平ニ切ル

一 掌燈と云事、其禁中にて節會此時主殿寮の官人片手に  
 脂燭を持片ノウヤ小きわらうくまぐある土菴を拵て下より  
 指留紙受け拵身り此殿の階を昇りて主殿ノ月と云女官ハ  
 己ノすを主殿ノ交取て脂燭と土菴を拵てまぐ拵るを掌  
 燈と云 掌ハタテコ、ロ 右の土菴の中ハ代々の脂燭をまぐ入墨也火  
 の下へ為へき用心ハ土菴を拵て下よりまぐ  
 一 蠟燭の事源順の和名抄燈火部曰蠟燭唐式云少府監毎年  
 供蠟燭七十挺ト見タリ 順ハ延喜天 曆ノ比、人也 職負令主殿寮ノ令ニ云頭一人  
 掌供御輿輦蓋笠繖扇帷帳湯沐洒掃殿庭及燈燭松柴燎  
 ○義解云謂油火為燈蠟火為燭也と見たり令ハ大宝年中ノ令ヲ

養老年中ニ改ラレタル令也蠟火為燭と何るはらふも也其此既  
 子蠟燭あり令名抄ありも以前の書也らふもく上古より其也  
 太平記下學集庭訓往來親元記康富記等も蠟燭の事  
 見らるる共略物ある也殿上は必油火を用らる也  
 一 うち急ぎとらうちおきとも云相合銀まで花ごころ色とも作  
 りする物也廣くは小袖入る時のおきとも云物也婚入記は  
 見たり花の枝を合銀を赤て飾る也うち枝と云おきとも云  
 物故赤おきとも云之橋の折枝あるも有り

一 縮もとも布もとも四方は廣く縮ひつておきつむを古ハ平  
 裏といひ之敷中日記かとも云つてもそのゆゑ今ハ縮もとも

縮ひるるをぬきさとの布にて縮ひるるを風呂敷と云古ハぬ  
 くりさめり敷といふ名ハありて縮つてと云く又縮  
 まつむあとも事も日記はありありさとの風呂敷は入る時  
 湯殿はあきて湯よりあがるも耐是をのこり物也物を包  
 むは布を縫ひつけし形なり風呂敷の表は似るが風呂敷  
 とのひあつたりたるは近世の詞あり

一 香の道具いりハ香炉香盒火取香炉は入る香炉は入る火は助金香筋  
香をささむ 灰お銀葉香あき火を急入香のたき 是ホハクリ  
香をささむ 火あぢ香炉のち灰をうけて火を急入 銀けみ銀葉をささ  
香をささむ 銀臺香をささむ 香札筒あとの近現代出  
 物也いりハ銀葉をハ火ぢは指をそへておき丸あける也



香匙ハ香をまき  
みさちハ火助  
ハ火をく火助  
眼をさみちを  
おしんめえさ  
一ノ二と名  
まじりておけ  
ハ右のゆゑ又香  
匙ハ火助ハ香を  
まきさすト云  
の箇と云くお名  
筋絶ト云

八卦香炉とハ八角ありて八  
卦の形を付する香炉あり 香炉ハ時ハ四季の卦を面する  
やうふて此心得ハ賞祝の箸 釜の内器各同前ハ此  
字をこあひ四季の灰おしやうあるト云 此のうきまの云

一 香筋ハ上古ハち 上古ハ薫物を用ひ 故香匙を用ひ之  
香匙ハたきおを 後醍醐院の河内系極依渡入道道譽と云一人  
沈一をを焚く事を好まけり 大きおい色の香を調合する 沈もその  
一をを好まけり 沈ハ沈香 沈ハ香匙とてハ此の香をすせり 沈并  
也今の伽羅の香 沈ハ香筋ハちまじりてハ此香筋ハ古き松の木  
の心乃木目のちまじりて通るなるを削りて香ハ金葉  
を名む也 銀銅朱鉛の乾金真さをまきくく香を沈ハ

眼を用ひて 雲母をもちて香炉ハ四季の香炉又内をのめを  
まじりてハちむ之れハ香をまきく 松の木を削りて香ハ金葉  
を名むハ此の香をまきく 金葉をふんじ也 此香家の香  
一 沈ハ木の品六種有り是ハ木のちまじりて六種ト云 伽羅 真南加  
真南蛮 佐尊羅 羅國 寸門陀羅是也

- 一 名香ハ六十一種有り 此六十一種と云ハ右ハ不記す 蘭奢待 一名東  
大寺ト云カ 法隆寺 一名太子ト云 三芳野 伽羅 紅塵 伽羅 古木 伽羅
- 中川 真南 法華經 真南 廬橘 伽羅 八橋 伽羅 園城寺
- 道遥 同上以上十一種 似 一名正壽寺ト云 富士煙 新伽 葛
- 蒲羅國 般若 伽羅 鷓鴣斑 色黄ニテ鳥ノ羽 揚貴妃 伽羅

○青梅カキ如羅カ ○飛梅トビウメ ○種嶋タチガシマ ○濔標シラフタシ ○月ツキ如羅カ ○龍田リウテン如羅カ ○紅葉コノハ  
 ○賀ガ斜月シヤゲツ ○白梅ハクバイ真南マ ○千鳥チドリ如羅カ ○沓花ホツケ如羅カ ○老梅ラウバイ如羅カ ○八  
 重垣エカキ如羅カ ○花宴ハナエン如羅カ ○花雪ハナユキ ○明月メイゲツ ○賀ガ ○蘭子ランシ ○卓シヨク ○橘タチバナ  
ハナニルサト ○花散里ハナサンリ如羅カ ○丹霞ニシキ如羅カ ○花形見ハナカタミ新加シカ ○明石アカシ真南マ ○須磨スマ真南マ  
 ○上薰ウヘカキ ○十五夜シウゴヤ ○隣家リンカ如羅カ ○夕時雨ユウジグレ真南マ ○手枕テマクら ○晨明アサノミ真南マ  
 也 ○雲井クモイ真南マ ○紅ベニ如羅カ ○泊瀬ハツセ新加シカ ○寒梅カンバイ真南マ ○二葉フタバ如羅カ ○早梅サウバイ  
 真南マ ○霜夜シモヨ ○寐覺シメザ真南マ ○七夕タスガ真南マ ○篠目シノメ如羅カ ○薄紅ウスベニ如羅カ  
 也 ○薄雲ウスクモ如羅カ ○上馬ノボリウマ如羅カ 以上五十種 十一種五十種都合六十一種  
 之名香ハ慈昭院殿東山義政公 逍遙院殿三條西内大臣實隆公 志野三郎左衛門尉  
 信此三人談合有々天下の名香中一終一定め處ありと云々

沈香の草紙云々の  
 沈香の草紙云々の  
 沈香の草紙云々の  
 沈香の草紙云々の

一 沈と云々今此伽羅の事ハ能く木の水に入ると沈む也云々の香  
 と書て沈香と云々の水に入ると沈む也云々の香  
 一 沈の事あるハ沈のこもきを云々今云々たと云々の香  
 一 沈の箱と云々ハ沈香を入る箱ハ二重なり上の上の箱ハ沈香を入る  
 下の箱ハ沈香を挽切の鋸あり扱あをを入る也箱ハ梨子地蒔  
 繪堆朱書具沈金なり木板あり不定





女音湯卷十九云  
 一カケ地ニ時タル硯  
 墨純十トモ世二似  
 ナリケレハ云々墨徒  
 墨柄也

太平記卷卅五南  
 有輝起ノ奈三三島山  
 入道臣比常手執の皮  
 腰高を以て今村面  
 一ケををみくくと  
 なる人ヤよしうん  
 白田山狼のはの極高  
 ともいひの程とを  
 ともいひたり

美の如く柄をうへて  
 一 墨をまじへて手のよどれぬる也

一 一ウありと云ハ柄を煮る時湯をひく物之皮を輪をて角を

三のまゝ用る物之は戸にていとおくと云之今も糸大板  
 の人あといふありといふ也  
旧死よりあはせぬゆゑに  
古ハ足をひきよして輪をよみておきり

一 鹿皮と引皮と皆多し鹿皮ハ鹿の毛皮をて作るうへ白布

を付る厚りの鹿皮也諸ありあつ時毛の方を上りて皮  
 也引皮ハ羚羊の皮をて作る麻の皮をも用ゆ作極大袷皮  
 の如し是ハ法を付て毛の方を外りてうへ布の方を腰にあ  
 たり法を糸を結之腰につけたるまゝとて鹿之皮付布の裏

上より毛の方ハ地より毛腰の緒をときてあつとも同し  
 鹿皮引皮の事ハ大追物類鏡子あつとも一也

一 日けめ糸と云ハ女乃髪をよむ可  
たつまけ髪ハあつた付まづ  
くしと云おのごとく今のも

とハかりし髪を三つにけめをよむ也  
日けめの糸ハ髪を  
髪をよむ死又えん

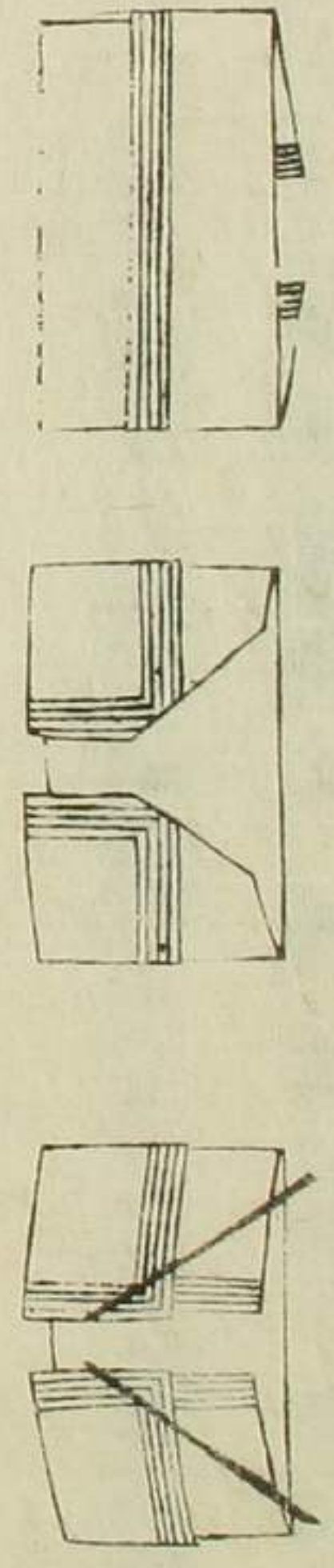
日けめ糸ハ髪をよむにけめる髪をよむと云ふ也  
 てあつ也其糸を日けめの糸と云也日けめ糸の上ハ髪を  
 をよむすくうけて糸をひくす也

一 ちうひの残と云ハ女の髪をくしけづ時柄よつたる髪のおち  
 をよむひ入れおきたる残也金残又ハ泥捨の残ハ五毛此  
 うすやうの残をよむておちけらひの残も城殿あり  
城殿

ハ系の  
職人也 一生お扱め元  
と云又さうひの紙をいふあり

は通りを扱め  
上の圖の如くは  
あり

○さうひの紙



一 おやうすりといふお扱入道具の記り有り麝香シヤウカウをまゐることあり  
小き茶碗の縁を巻くおさまりはつとやきおへ何れも唐物之麝香  
いけを巻く地水おさまりはつとやきおへ何れも唐物之麝香  
おさまり内は巻くおさまりはつとやきおへ

一 小見誕生の対犬箱を作りて小児のそばにおく事犬立ちとともさ  
犬の性ハ凶悪なりて魔障を退る物之依之犬の形を作りて  
置也禁裏シムツに之紫宸殿シムツ清涼殿シムツといふ所敷の帳臺マタタビの中へ

葉中元日の奇令  
正身位おどの時  
犬のうらみは年  
人の官人犬の多く  
そして君をよる  
おさまりはつとやき

葉中元日の奇令  
正身位おどの時  
犬のうらみは年  
人の官人犬の多く  
そして君をよる  
おさまりはつとやき

葉中元日の奇令  
正身位おどの時  
犬のうらみは年  
人の官人犬の多く  
そして君をよる  
おさまりはつとやき

拍犬ヒキイヌを作りて又几帳キヤウの傍にも拍犬をたむらひ几帳の如く  
おさまりを風ふめきちりておさまりの如く用也葉中元日は几  
帳の中乃こまのぬの目お光りあり又源氏物語枕草子にも  
有天子御即位の時御即位ハ天子のシメウイ兼明門といふ門乃左百二銅の  
拍犬を置也是皆惡魔を退るの意なり其用ハ門  
の扉を風よあをりせりおさまりの如く用也拍犬といふ唐犬  
の形にして尾お短ハ唐獅子の如く作りておさまりの如くお  
も拍犬を置也拍犬といふ子をあやめ  
犬けしこを小見の傍  
におくも拍犬の心あり小見の傍はあきりれてあきり犬の如く  
拍犬といふ子をあやめ

一 拵巾オリモンといふ織物も縁也甘坏歩乱箱の下におく也將軍曰元

服記は何の櫛巾の圖

將軍御元服記云後櫛巾長六尺横三尺六寸西面  
絲織色黄也御紋菱裏板引フシカ子染也

此圖類

聚雜要

抄二見エ

タリ

櫛巾長八尺弘廿二幅固文綾下染裏  
濃打物凡櫛管具也櫛管用時用之  
加冠用時十疊天打亂管蓋置之

如此四方ニ五色  
糸ニテ上サシ  
アリ此事雜要  
抄ニ見エカ  
書落シ十九ハジ

髪の具を受ふ玉子櫛巾の上にあくく下は若くおも櫛巾ハ

たとてお乱箱ハ納め右洞杯尻境同意櫛巾ハ小の寸尺

將軍ハ元服記ハ遠くテ拾のおも時代ハより家の

傳承ももとて一定の法ハありト大概を知る事也他

ツ金

水引ハ紙拾ハ紙拾を引る也也水引の紙拾ハ紙拾を水

引と云也もハ白一進物あり結ハ際ともを用

一 藥器ハハ唐土トて多きを入る器也法不のゆりとて多き

あり堆朱ありとふりたる物ハ禊の葉を入る器ト又禊花の葉をと

云ハ此ハ形を付る云花びろのそり返り言形ハ禊花と云

一 盒ハ香盒印籠葉籠葉籠葉籠の堆朱トて多きを入る器ト又禊の葉をと

とのともむ字とて朱漆をあつくぬりて漆をうづすともある

あげる也別紅と云ハこ海やの水雲美輪遠と云りて上

人形を禊花を多きと云りもある○堆紅ハ多きと云

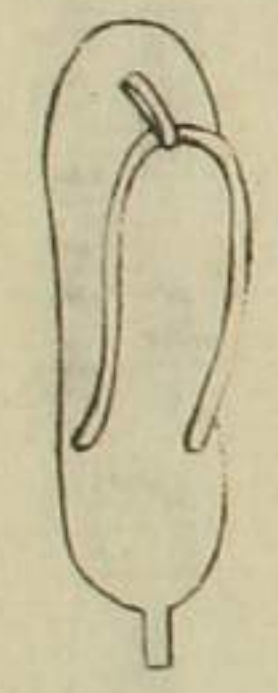
あつくと云りてあるも多きと云りもある○金糸ハ多きと云

りも多きと云りもある○金糸ハ多きと云

山々ノ平當時ハ  
 グリトバカリ云  
 ノ俗語ナルベシ  
 香盒或ハ根付十  
 トニ多クアル也

木何り上もけりめも馬一馬金糸と云○紅花緑葉ハ花糸を赤  
 く枝葉を赤くぬりたる也○桂漿ハ色馬一わりの小赤き糸線  
 の筋何り又ニ赤き糸又地を赤くぬりたるもろり地紅の桂  
 漿と云也地ハ黄漆也○犀皮ハ色馬一けりの廣く淺く  
 赤き色馬一色の極小丸也堆鳥ハ桂漿のまろくま  
 とハ◎◎◎地ハ黄漆之也地も馬一○堆漆ハつゝ朱  
 堆紅のまろくまも馬一地ハ黄漆見んぞ地も赤一○別金  
 常日日本も馬一玳瑁蒔繪也玳瑁ハ今ノ世ニベツカウト云  
物也梓并ノドニスルナリ右東山教法性表嚴記見えん  
 緒太と云ハ蘭の草履也常此ぬくの紙緒のまろくまの緒を太

く〜〜〜也生中のみき不を三寸廻り極小丸と云式正の装束  
 美〜〜〜也今世は緒太をのげとも表有とも蘭金剛と  
 毛蘭履と云之女の毛ハ緒細き〜うらあ〜と云を本名と云ド  
野宮定基船の履有〜  
 一 げと云ハ草履の〜  
 一 あんごうと云ハ草履の〜  
 一 女ハあげを〜之緒太をを男も〜也  
 一 志手取とハ尻切と書く草履を造るるもきね道の志あり  
 時とく極〜今の世ハ雪踏と云物ハ志手取を〜物と  
 雪踏ハ千利休の志出〜と云近代の物と志手取ハ昔より  
 あり〜也志手取の形は



檳榔毛車毛蒲

葵ノ葉三在る蒲

御即位時綾

蒲笠モヒレウニ

テフクナリ



楮太とも云  
あさふを  
まくすよハ  
あびのよハ  
あまやハ  
緒め也

蘭  
を  
しん  
と

一 檳榔の裏無のり太平記卷九 主上上皇法 門主ハ長くと タタレ

長宿の衣ハ檳榔の裏無を被る云 ウラナシ 昔ハ宿の名也古

檳榔ハ蒲葵と云木の子 ヒリヤウ 上古ヒリヤウト云文字知リシユハ

蒲葵ト書也檳榔ハ別 ホキ 木の形も葉も椶櫚の如く葉ハ志の如

よりも長く白く枯セハ管ハ似たり スゲ 葉も似たり

檳榔の裏無と云く葉をハさるもの云徳太とも云野官宰

相定基根云徳太是俗名ハ上古ハ裏無を採ハ檳榔を用事

觀應二年四月四日の園大曆二不見ハ今ハ松心草を編て作り以

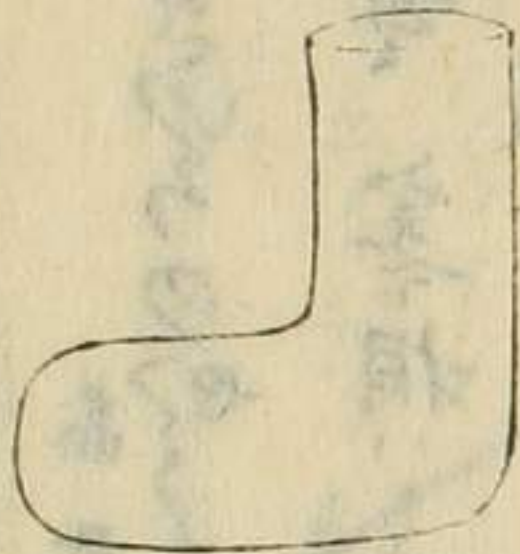
鴨沓のり公方様は成牙沓 カモグツ 馬沓 馬上沓 をめさせ可なりたよりの

させず但鴨沓あは右よりめさせずとあり鴨沓と云ハ鞠

あとの時にも用ゆる物也其形は云々之沓の鼻先を丸く

作たる物あり馬上沓あどの如く鼻先をつまむ花の圖の如

鴨沓之圖



親長卿記云明應五年二月廿一日親王御方比蘭  
張行親王御方萌黃陸水干以葛袴今若鴨沓

給云貞知天正記云鴨沓のりを右よりめさせず馬の沓の

ハ左よりめさせず云々馬の沓ハ馬上沓の事也 こゝにメモ  
五音通

一 射の物之双の糸長サ三寸五分斗也柄鞘あり唐木又ハ漆

ぬり射槍ホもろく一寸法木定あり二本の内一本ハ左の如

右双の如右の尻を取一本ハ左の尻を取

堀川百首惟明  
親王との地は  
ありあり鴨の  
つつかきとあり  
沓のりともある  
ら



光信 ヒモノシ 筆に捨物師がこげ物作の辨を画たる傍の詞書もあはけま  
これいふは太夫の何のよめはあつらんかやんと有り是湯桶  
はこげ物を用ひるを知らず同繪は酒造りを画するは竹  
の輪を入る桶を画するは是の標也

一 袋と云ハ布帛 ヌルキヌ あらまは縫ひしるをさつを云ハ何は弦書  
の本名ハ弦袋と云まのきー入箱を尺袋と云るは戸  
を入る布を戸袋と云る等の餌袋也竹藪也公家の近衛の  
官人の腰にける奥袋といふ箱を鞍の皮にすまの金銀  
より奥を作りてけしる物は何れも縫する物ハあきれは袋と云  
一 うもぬきの器といつかけと云る何の金泥をぬきし沃懸

たはは仲正  
ともあつた風のま  
まあはゆのれ  
てなひきまき花  
のつら化

野宮半相定基の  
説云鞘を金  
也ぬりは鉄を  
いふ地は

と書といひけとよむ也 イツカケト云ハ賤シ 沃の字ハそくくともむ  
そくくといふ水あををける事之金泥をぬりし辨合をとり  
かしてそくきりける箱あるはいつけと云水あををける事  
古くはのくまといふ枕草子は白きあひのけさせしむといふぬき  
何の又源氏物語 すき箱 火とりをさく 瓶 いのけと何の物も  
魚ハ太刀のさやも イカ 鞍も イカ 箱も イカ 沃懸地 イカ 日記ハ  
あるハ地を金泥 チニ してぬりてせよ イカ ぬき イカ ぬき イカ  
沃懸地を今いふるあり地と云 箱のまは香盒のまはあはけは金泥ぬり  
ころをのころけと云る人ハ箱のま  
とぞのり金泥ぬきを云ハあらず沃  
懸ハ金泥をぬき懸神のまあり

一 ゆらん イカ 輿 イカ あらまは唐櫃 カラヒツ あらまは イカ ぬき イカ ぬき イカ



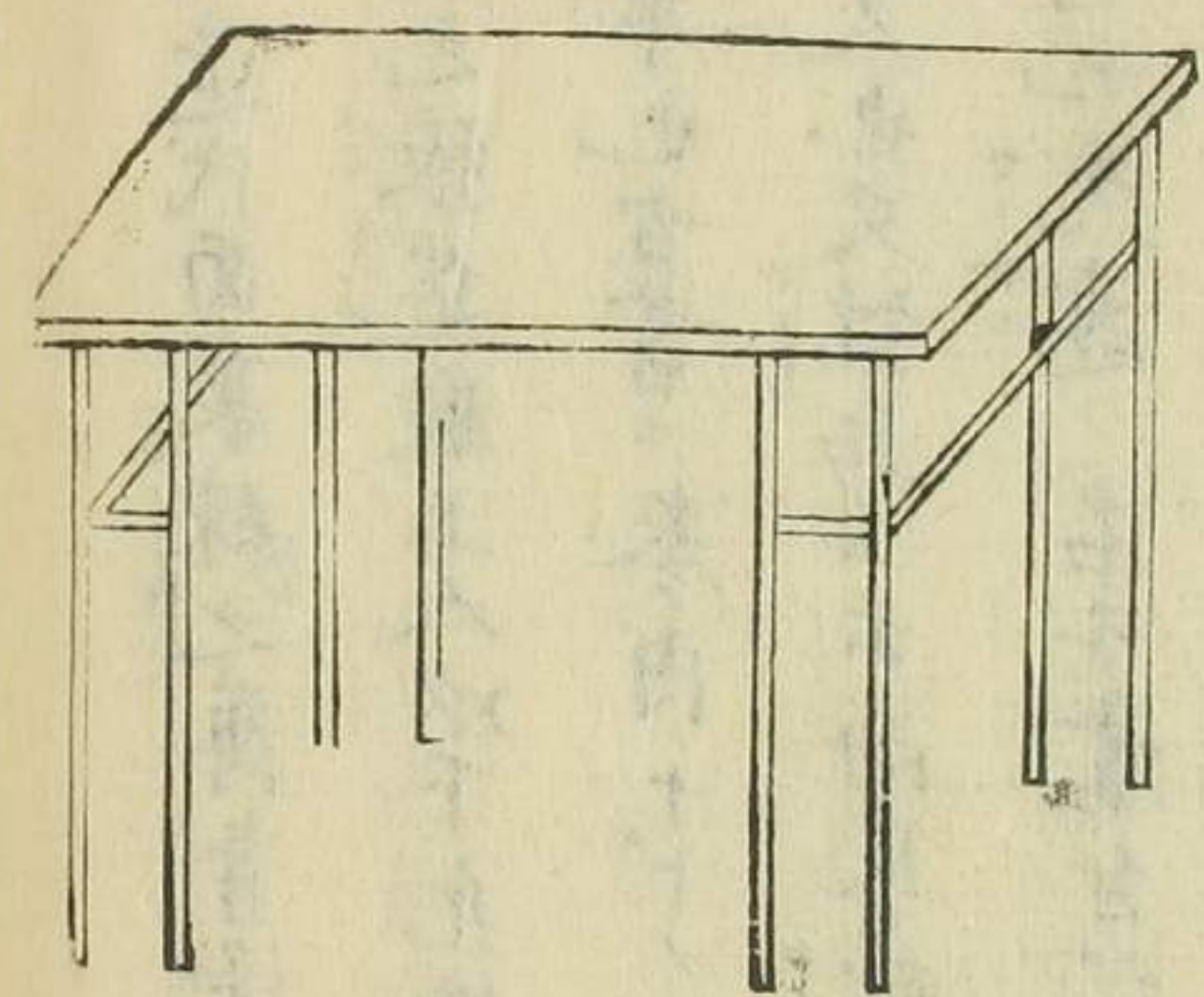


八足の事年中恒例記六月晦日水無月後の条云齋藤将監仍  
 庭上祇儀にて八足并御座アツカヒヤ也云々八足と云ち、  
 八の足を付くる案也八脚の案ト云物也禁裏にて内神事の  
 非へ供へる物非酒を外盛り物を載つゝ元也形丸の  
 乃如

八脚の案

白木也

元文大嘗會ノ  
 記見タリ



一覽箱と云物ハ宣旨センジを入フバコ文箱也源平盛衰記卷三十三頼朝征夷將軍

宣旨宣旨庚辰關フハラ云累葛箱ハコ奉入處の宣旨袋を傳取存ん左右の

手手をさくく中畧覽箱の蓋は砂合十兩入て巻ス披小覽箱

菓葛ワハラを以て作りける菓あり右の布文は累の字サ冠サウ冠あり

信守の誤歟

一燒石ヤキイシと云今此温石オンジヤクの事也源平盛衰記卷四十五二信祥也女院

後れをトと燒石とハ硯の菓とを左右のハ杖ツエはハ牙

をヲまモくクそソつツきキそソめメ入ル也温石といふは唐の眞の温石ハ自然と温あり

也也と云との物物言言故故

物の袋ハシあアの端ヨロヒ鏡ヨロヒのハシ小コ子コの端ハシあアるルをヲ見ミるル





一 道具ドウグと云詞ゴトバハ其家ノカギマツル飛物ウツハモノを云之者ツエシハ儒者ツエシ  
 文卷モノのそ用多ツク机ツク硯ツク筆ツク文器ツク筆架ツク文匣ツクの類々文の道地  
 具也武士シノ禮レ巾シ鎧シ刀シ弓シ矢シ太刀シの類ハ武の道ノ具也  
 出家シハ念シ教シ拂シ子シ証シ鏡シ被シの類ハ佛のそ具也ダイシノユキ  
 手テ斧ツク鋸ツク工匠ツクノ道ノ具也ツク此外レ准シ知シべシ一シされバ武士シノ詞也  
 道具ドウと云ハ武器シのそシ武士シハシのこシぎシりシんシかシなシどシの類シをシバシ道  
 具ドウと云シマシドシオシモシトシハシ大シ道シ具シ拾シトシハシ云シベシキシハシ外シハシ知シルシ一シ  
 一 道具ドウノ時コキ給シ合シ具シあシどシの故シハシ座シ字シをシえシめシ也シ其シハシ草シハシ座シの  
 草カと云シハシ座シのそシハシ草シと云シハシ座シのそシハシ草シと云シハシ座シのそシハシ草シと云シハシ座シの  
 草カと云シハシ座シのそシハシ草シと云シハシ座シのそシハシ草シと云シハシ座シの  
 草カと云シハシ座シのそシハシ草シと云シハシ座シのそシハシ草シと云シハシ座シの

座の字を用ふ

一 出シ來シ合シの足シ駄シをシいシまシちシハシ待シの字シ也シ其シハシ座シの  
 出シ來シ合シの物シハシ皆シ結シの字シをシ付シけシテシ古シの詞シ也シ其シハシ座シの  
 出シ來シ合シの物シハシ皆シ結シの字シをシ付シけシテシ古シの詞シ也シ其シハシ座シの  
 合シとシ一シ職シ人シ盡シ教シ合シ乃シ歌シ○このおシあシれシあシひシもシなシりシ海シ也シ  
 うシとシ初シ一シえシぬシまシてシ其シのシ月シのシげシ○こシのシ意シハシ海シもシさシやシもシ  
 の座シをシいシつシまシしシ海シもシさシやシもシのシせシげシみシやシ○夫シ木シ抄シの歌  
 又シ是シ漢シ如シ為シ○はシあシひシのシりシぎシらシきシのシれシこシまシりシ一シ世シとシいシふシ道

をあらうとぞ見ゆ 右のつれもまろと云ハ侍の字也買入を侍之町の字と知ゆるハあやまりあり

一古書よあがりつきの何の油杯とも油蓋とも書て燈の油を入

る油皿也あがりつきの字をみせよむべしと云ハ非あり

油次 ツギ 油を分瓶をハ油滴とも

一硯箱香匣 スリハコカハコテハコ 外侍侍の侍格ありて書と云あり筆

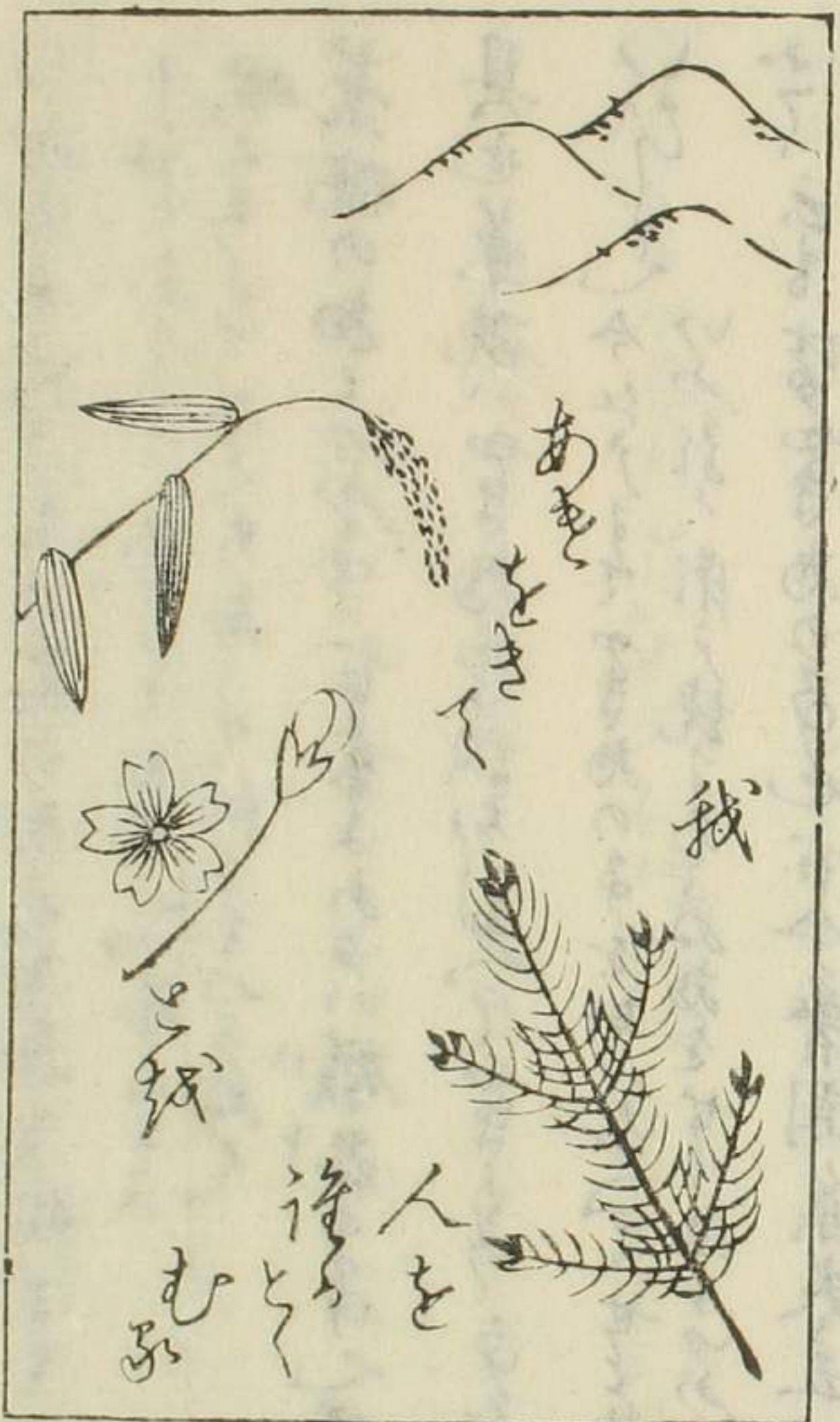
手と書之香包の紙あども テカキ あし手書をすし何ぞびき

とハ古書などをあくハ文字と侍を交て書くたはハバ

何びきの山とて戸をあけおきて我より人をきれうとぞ

むとといハ秋をあくハ丸のごとく

又ハ侍ををきくも何の



かのゆありあま  
文字と侍を交  
てあちちとてあ  
ありちちとてあ  
あり法武を  
あきちちとてあ  
ハ道達院内府  
寛隆公の五月兩  
記は見えあり

一まろきと云ハ衣服をのる イロク 柴のりて夫木抄のあまの蒸棋和る

あまぞわもまろきの枝はみまづの志がうあはばやあづつん

まで ○ 猿因 ○ 海やあまのぬれきぬわもみまらと云ハ松ぞ

まろきありま ○ 源兼昌ぬれまも今ぞまろきふりけてあす

法門流唐土山札  
の事云に法門流  
英坊官ホよりト  
の方ハもん因ち  
やんんの世をて  
用のまゝ

づきしとたりよとのあゆみ  
以上本物よと云く 掛せり  
いとち服部の服の字も衣服入ツ  
詞の助<sup>キ</sup>あまう風時の風移りかあとの  
新まは初めけあり  
キとふあも竹すも月も多あり服を  
のく木あり初まきと云は  
一 火打も火を打出しては火をうつし  
付る物を今ち布とち  
と云古ハ布とを云く 夫木抄六帖題衣  
笠内大臣の袂

○打出も火うち石の布とを  
あま何もつらぬ我身あり  
わくをあまはわくをあま  
わくを  
火うちもわくをあま何もつらぬ

一 茶碗の物とつらう古書あるハ磁器の  
多ハ磁器とやき物の通  
具也茶碗ハやき物ある故  
あてやきものるをちやん  
の物と格下  
いひ 今江戸にてやき物のるを  
あてせと物と  
いひ 今江戸にてやき物のるを  
あてせと物と  
茶碗の香炉  
かて云も皆やき物ある也  
古今著聞集卷五  
和歌に女房の

障子のくさをほくまりもる茶碗の  
枕をちやんあるも 獅子の形  
作るもやき物の枕也又  
仙傳抄ハ 三茶碗の  
立花の法を云 ちやん  
のくさひんを  
ちやんの基よす 唐うし  
ひくらんのおん又く  
らん卓あて  
此うしをく或ハけん  
かまもよ記云く 是又  
やき物の花籠  
や香物のまを云く又  
將軍義輝公三好義長  
亭一陸成之記ハ三具  
足香筋火筋香合卓子  
よきる茶碗の三具足也  
云く是又  
やき物とて三具足  
霍龜の燭臺  
花籠 香炉 杖作り  
くさを云也  
一 器物の飾の紋ハ  
猪の目を用るも  
是ハ  
つらけのい  
の字ハ  
あり形も似る故いの  
めと云也目ハ  
虎の事也何の故  
いの目を  
用るぞとつらけ  
ハ是ハ火の形也  
火ハ大陽也依て  
統と云く



をき上げたる也平文ハ高クせずし左の縁の如く  
日輪を帯する前後の事を云也

一 何の調度道具の事なるも思ぬりやん文モシの事まさかを帯するハ山等の時ト用也

又いふハも思 服者アウシヤの調度コウレツノモノを文也 服者トハ父母兄弟  
親類の死シ付終

字の定紋シの事シぬるも思ぬりやん也 其の事シも文を帯する事シ

ハいむる事シ 太刀タチあるも服者シの事シハ思ぬりやん也 其の事シも金  
具シも有り也シ 其の事シも思ぬりやん也 其の事シも思ぬりやん也

一 調度シなるも思ぬりやん也 古代シハ近世シの事シ也 古代シハ花を  
かき草シあるも思ぬりやん也 定紋シと云物シハ軍中の目志シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

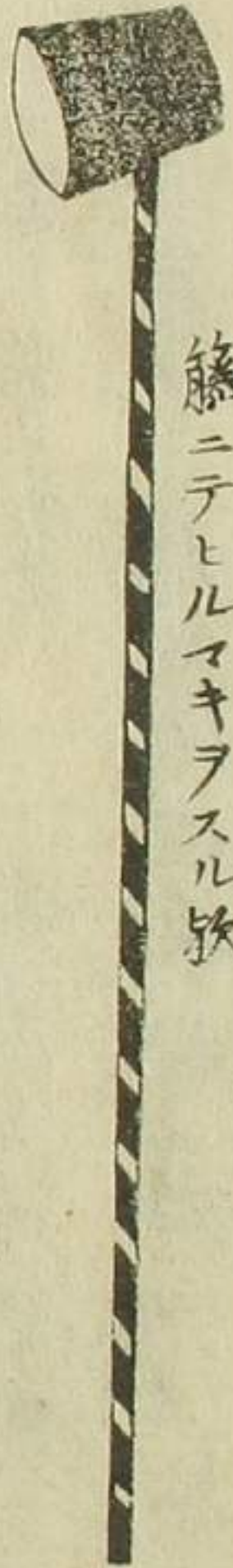
も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ

も思ぬりやん也 旗幕シなるも思ぬりやん也 旗幕シハ素襖シ衣服シ法の調度シ



越後布ハ今ノ越後千々也水ヲ通サン為ニ此布ヲ用也水ヲ通ストハ  
水ヲコス也塵ヲ去ル為也奥州後三年合戦ノ繪ニ義家朝臣  
凱陣ニ馬ノククニ副テカ者ガ首丁頭中ヲ  
着テ柄長ヒサコヲ持タル躰ヲエガケリ

柄長ヒサコ



藤ニテヒルマキヲスル杖

一柄長抄ハ子中を付る薩戒記應永世二年九月十日ノ条今日  
上皇御幸東山泉涌寺第中畧次下北面六人著布衣一人持柄抄  
在御右方抄黒漆蒔繪菊八重有金物付新午中巻付柄懸  
肩持也一人御劔在御左方柄長柄ハ子中を柄結付  
奉之永九年合戦の繪も柄長抄ハ子中を付一紳を画  
うさくさく 墨花の如し

一京極宮諸大夫尾崎大和守

説云昔遠所行幸ノ時抄ヲ  
持サレハ幸有ク年中行事  
繪巻おミモ抄ニ手巾  
付シ紳見エタリ是ハ畢竟  
所ニ水ニ用ラレシ物也



一蛭巻ハ長刀の柄エムキ鞭ヒルマキあぢの筋を藤トウを以テ


巻也ヒルマキと云虫の巻ヒルマキ自らヒルマキまたと云云

之て巻つけヒルマキくも蛭巻也ヒルマキ細き虫ヒルマキあり細巻ヒルマキを巻也

と云狼の蛭巻と云ハ狼の輪ヒルマキを入る也又ヒルマキ又もあつてもとく


其の形もやを交りては横を卷と云也 是ハカバ 是ハヨコガヒ 横爲

算葉 ヒユリキ ありては何り樺を卷と云 是ハカバ 是ハヨコガヒ 樺樺の形を

一 器物の飾は眼象と云 キツツ 何り三方四方の衛重 ツヅカサ  此の形を

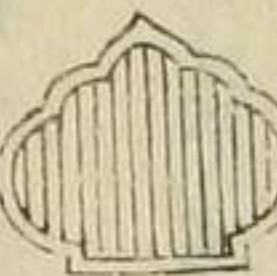
眼象と云 穴三カ方何カを三方と云 四方は穴ありを四方と云 其外何れも穴を飾りあける

ハ眼象也 ハ眼象也 其の目ありては眼象也

一 器の飾は牙像と云 ウツハ 何り机あり脚 アシ  此は牙の如き

内 ケシヤ 牙像と云 脚は限らず何れも是 周礼ノ考工記礼記 等ニ牙象ノ事アリ

一 器物の飾は青瑣と云 モノサ 物あり車の腰衝倚子 ゴイシ 經机木の如き


あり 色青シ  キサミ三角ノ エリ 此は彫り中を緑まを塗之古禁中よき

瑣門あり門の形は此物あり トヒラ 一唐の天子も此瑣門あり

一 也博雅瑣連也前漢書元后傳注如淳曰門楣格再直為人

衣領再重裏者青名曰瑣天子門制也師古曰青瑣者刻為

連瑣文而以青塗之也 韻會云凡物刻鏤置結交加為連瑣

文者皆曰瑣非特門鏤 貞丈按唐ノ青瑣  此方ニ云フ

ハ中ノ刻ミノ文 アマスギア 形ト見ユ

一 のこれ等の事三好亭は成記云は茶湯有氷き水初抄立

火き このれが注たふ歩墨也 とんぬ 又東山殿は飾記云は

茶碗の物 このれが注たふ歩墨也 とんぬ 又東山殿は飾記云は

別 このれが注たふ歩墨也 とんぬ 又東山殿は飾記云は

云 このれが注たふ歩墨也 とんぬ 又東山殿は飾記云は

青道ト六則 ノ事ニテタナニ 紙ナドヲオク耐 重シニ置ユハク ナク ニナリ

と何れを考ればかきをおきをかれがとあるべし  
 かれがと云より大よかるといふもかれがと云あるべし  
或葉人の  
 後葉多しといふきゴトクの間をカクレガのやとおきと云堂上より  
 かれを付たまふ間をカクレガのやと云其カクレガの間よりかれを  
 ため後ふゴトクをうけしなる物也ゆゑおきのよとカクレガ地  
 ぬまおきと云と云く堂上よりかれがの間と云るありし何れか  
かとも名をけしや  
いふと詳あるべし  
 一 かき板元服のむす品と板の板をいふくらむ物と柳  
 の板をかき板と云ハ漆板の上を板先をのせしをいふ板地  
 板と云を器としてかき板と云あるべしかきハ詞也  
 一 かくの物此より貞順迄に記はぬこの物は漆板を以てけし板と  
 置扇ハ十文字またては墨ハと云ふこの物ハ廣葉の物也

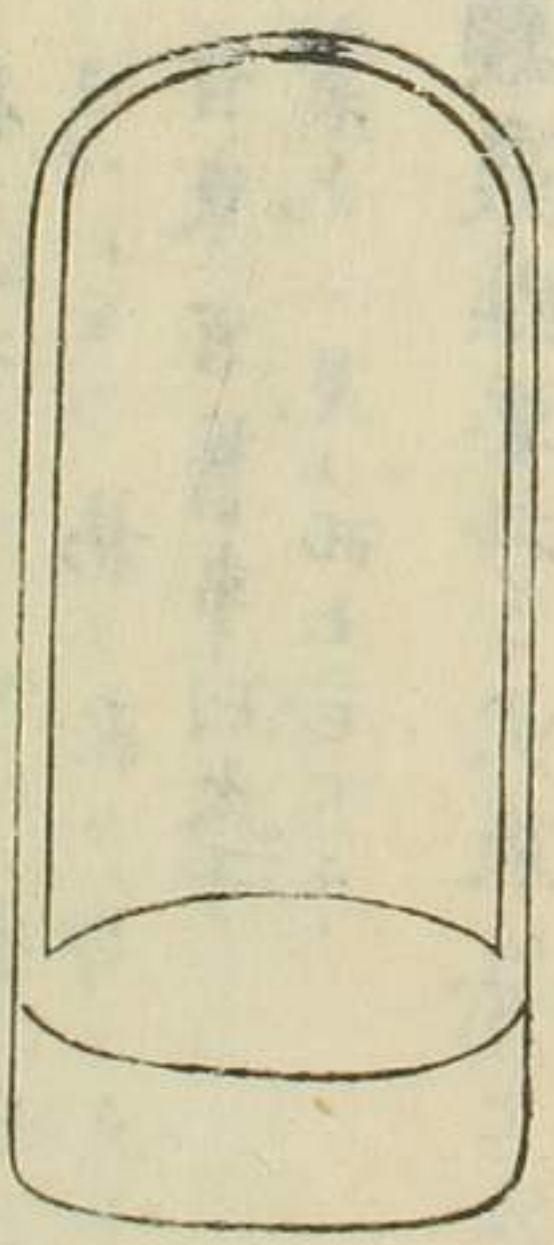
一 文箱古ハ惣梨子地ソウナレダすく一面ハ苜蓿をくたる物ハ公方持用が  
 られし也移ハ惣黒めりすくすこの上ハ草木のやうあど  
 一本すきあるべしたる也常照愚草 伊勢守 貞陸作 云文箱のすあり  
 がひとすきあるべしをハ可有斟酌すきある草木一本あるハ  
 少苦と阿也 文箱の名文的大永頃の書ハ足元より  
ありし物あるべし文的大永頃よりあるは未だ  
 一 口くぎとハ口くぎのぬの也渡器ワタシと書あるべし口くぎと云  
 わくも書と云書と云口くぎと云くまといえんばと云ある  
 口くぎと云物と云あるべし永享行幸記ハ漆口くぎ白と  
 あり是根と云くきと云口くぎと云物あり 又云口くぎと云  
云婿入案と云あり  
 一 この赤色のす宝町廻行幸記云常山所の山具足系と云る所

奥訓往來云此外  
 少辨子金を授  
 善き  
 婚入記云ハシヤ  
 上ヒヤヤフセ  
 治ニホキタヒラン  
 ソウト云ハヤマリ  
 十有

齒くらこの箱は提一對のふか色一對と此うふか色と云ハ別を  
 ろを入るでこの箱のふか色と云ハ別を  
 くれと云をかあつらと云也五音お通也ナニヌ子ノ ぞうづとハ  
 おまごろを入る物の縁を少作りみだるひのやうにたつ物  
 てみるお一則金杯のふか色縁のふか色一對とハ一つふねをいせ一つハ  
 ぞうを入る又提と云ふんぞうのふか色と云ハ一つひさびのぬり物を作  
 ると物くは提と云ふをいせと云ハ一つづと云ハ  
 提一對ナールハ  
 カ子ト水トニヤ也

一つづのふか色縁のふか色と云ハ今世の火取のふか色と云ハ  
 今世の火取のふか色と云ハ今世の火取のふか色と云ハ  
 取のふか色と云ハ今世の火取のふか色と云ハ

と云道可尋知也火取の圖を記す也



火取ハ木ヲ作り  
 漆ぬりマキエアル  
 シフタモ木ニテ作  
 リアコノ如クス  
 カシタル也キ、香  
 付トハ別也

一火取かろのふか飯尾縁赤古漆成記云漆火取 白を根を  
 作りたる火取のふか也これハはあひをいせ物か或は縁のふか又  
 ハ縁のふかをいせ物香をいせ物用也この火取香付了  
 香のふかをいせ物香をいせ物用也この火取香付了  
 一おきりまのハ灰をかかぬ形今世の女髪の具と云ハ  
 今世の女髪の具と云ハ今世の女髪の具と云ハ

法隆寺の山邊具此説文の内如き如き見たり  
一説オキカキハ火カキ  
ニテ俗ニ云ツウノ、コ

トナリト云フ 京都ニテハ  
オキカキト云ナリ

古今六帖火取  
の籠  
之  
を  
ハ  
カ  
キ  
ト  
云  
フ  
也  
我  
々  
ハ  
ハ  
カ  
キ  
ト  
云  
フ  
也

一  
ふせごを云ハハせごの略修ん竹を箆を作り紙を張  
あり穴をあける物也火鉢の上ハ衣の籠を懸て衣服の  
ありをとり家抱し法隆寺日記もふせごといひ拾遺貞外  
卷上世首の内定家々のあひうちふせごの志ごの埋火

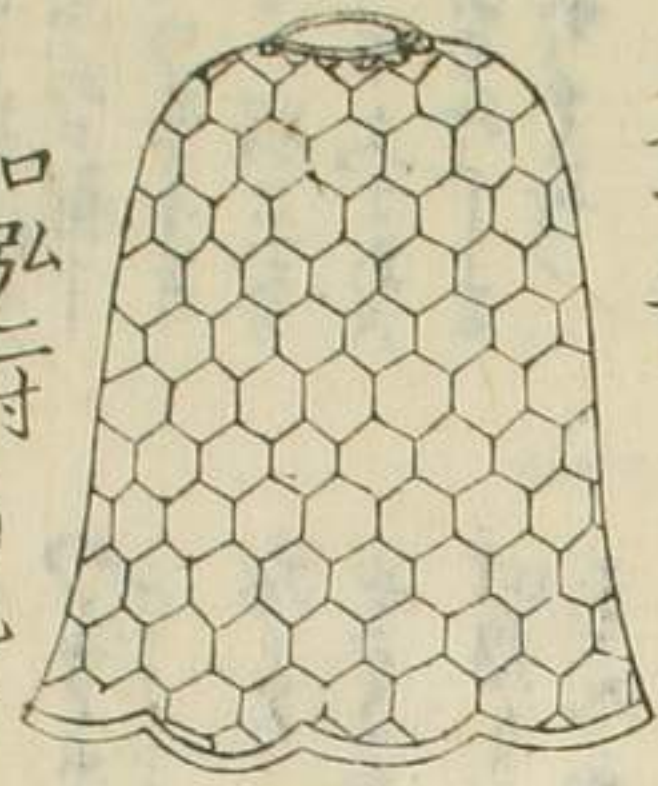
ハ春の心やまぐらふん  
衣ノ心マトハフセコノ香ヲ焼其匂ノカ  
ウバシキラ梅ノ花ノ匂ノ匂ニタトテヨル

ナリ事物紀源舟車帷帳部晋東宮舊事曰太子  
納妃有衣薰籠當是秦漢之製也ト見ユ西土ニモアリ

一  
ふせごのふり又考て衣子記を類聚雜要抄ハ火取籠と云物有  
火取籠ハ本ニテ作り箆修アリフタニ  
上ニハ中ニカ子ヲシニニテアミヲ作り也

ラタル物ト見エ火取香炉ノ本式ナリ歟  
火取籠ハカゴヲフセタル如キ故ヲモト云歟

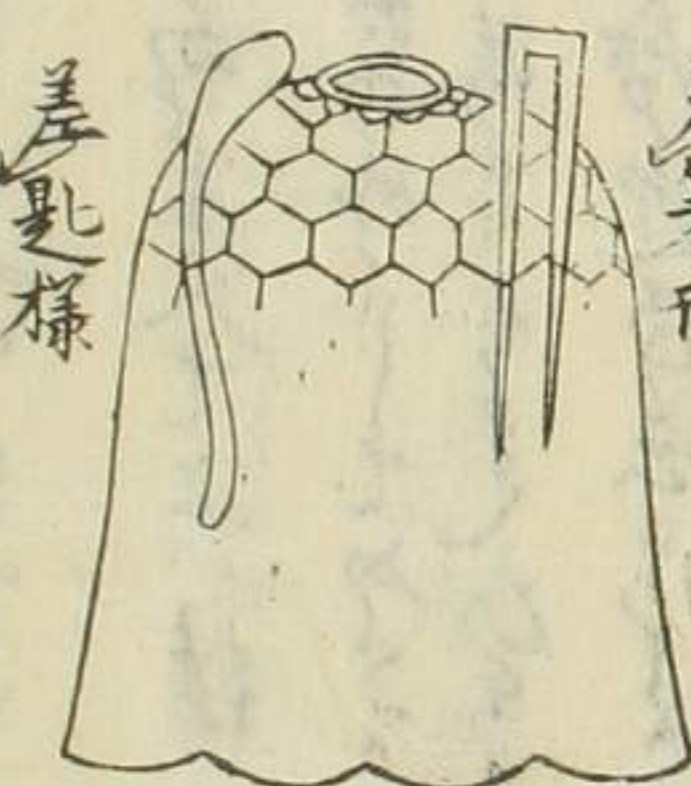
火取籠



口弘二寸  
高九寸五分

八葉八角  
口弘六寸七分  
糸金 銀廿六兩一分  
如上下定  
單切百廿疋 糸金方 組料

差箸形



差匙様

箸形



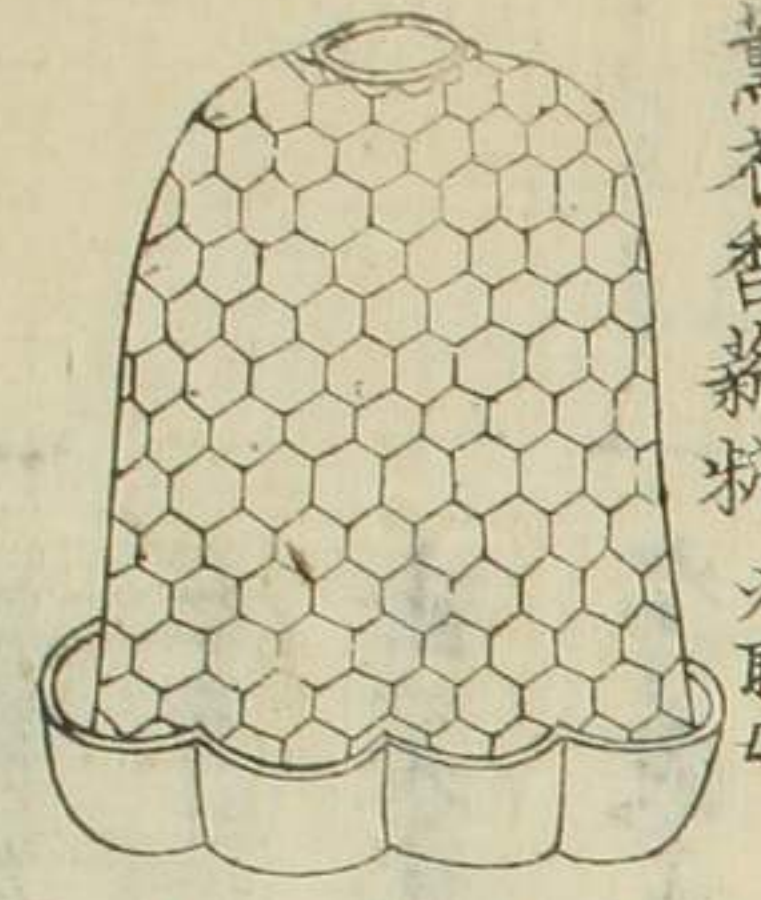
三兩

匙形



三兩

薰衣香薪料 火取母



八葉八角  
口白錫用途四兩  
深三寸  
蒔繪金五兩三分  
漆三合四勺  
口徑七寸三分

螺鈿料二百六十疋

内掘料十疋  
内塚料五疋

薰爐



深一寸五分  
足高五寸  
銀細工卅五疋 鉢廿疋  
口徑五寸三分

めのこは...  
 二品ある...  
 下よりある...

一 火桶ヒヤケの多岷江入楚注云火桶ハ火取の大さも扱云火桶ハ  
 肉を焚シメツ木の切好も張外を桐の木をくまきをもをイハ  
 或ハ木地又ハ箔ハクえだもをよまさいも法を書きも扱

一 寄物ヨモノの多岷江日記云此寄物此てわけき婚入條ウケより  
 何れも法ホウの多のゆりてらて出せしあきあげな意あてん  
 つまこつゆの羽ハを入て上ハ縁ヘリもも也  
 ありてをさく子孫のゆりてあまをゆりての上よこあり  
 するまの羽を入てよを縁ももこしひちを懸るあやまらあり  
 月ツキの多道具又婚入條ウケのゆりてあまの少袖の意イ肩  
 を入るあり  
 高タカハ別ワケ又女房メカド職シヨク条ジョウ云コト古書コトより  
 上ハ遮ヘシロ也むりハ縁ヘリをさく女房メカドのより何れも扱ウケす

八寸五分斗人の廿のゆりてをさく旧記より何れも扱ウケす  
 一 一ハより一ハより扱ウケす二品のゆりて也

一 一ハゆりてるゆりてる道具記云はらう一ハゆりてるゆりて又ゆりて  
 日記云此寄物然ゆりてゆりて女房メカド縁條ヘリ云一ハゆりてサセハ寸  
 斗トゆりて四角ゆりて物之志や木キの如く寿の対ゆりてをさく  
 女房メカド一ハ懸るゆりて也

一 造紙箱サウシヤウ或章オウ料紙リョウシ第ダイ事ジ古ハ料紙リョウシ第ダイ事ジを草子クサコ第ダイ事ジ云  
 一 物也後ハ料紙リョウシ第ダイ事ジ也明月記云寛喜二年三月十日  
 手箱テヤウ二合置之云御草子箱ミクサコヤウ入白物具シロモノ蔭カゲ給御ミコト硯箱インヤウ置之云  
 一のさしりてゆりてたをわくれ二事ゆりて硯インを流

此はたゞのよひにばよはとよりかやゆきしりのあふとりのひよ  
かいおけはそむとまゝ永享九年十月廿日室町殿行幸記云々  
此不具足浮文はさう〜若も書中よ色し入る

一 硯箱又硯蓋の古し〜硯箱は物を入て人も贈り又あふ入  
て人のあふも出〜きりともどゆより蓋のこ用るはたのこも也  
今の世も硯蓋してきふあふそのその残むはあふ〜蜻蛉  
日記上巻今入として出る日つりて入るもさうど〜ひとさうり  
はよりそのあふあふが硯箱よむとまゝひよ入てさ〜更級日記  
云々あんの金ぬと〜さふ〜ひたる尋ねて〜やりのたぬめづし  
かりてよら〜びは氣のをあふ〜たると〜初〜めてき〜はひ

硯のあふよ入てあふ〜後拾遺集卷十五雜五後論  
法時上東門〜事阿ん〜るを〜りてのよら  
硯のあふ〜硯箱入てき〜ひたる〜よ〜  
よ〜る〜書〜歌合の牙喜〜  
月内裏あふ〜度由家文堂用硯蓋野行軍用硯  
〜大瀧美云〜花山院風流者〜す〜  
度ともあふのけら〜る〜六官の流〜  
〜硯のあふ〜硯箱入てき〜ひたる〜よ〜  
長足長〜る〜硯蓋の  
〜前張の〜る〜

一鏡箱の事倍長かとの室也イニ後撰集卷十九離別遠き因す  
 ぼりりける人よ旅の具つらけり鏡箱のしらぶらりけりつら  
 ららるるおちかたのけりし身をつららるるからさるるす  
 こらみかけばうらこころ悲しそらるる

一鏡の表模様の事伊勢集云鏡のうららつたのこをぬつて  
 まじりなれはちとせまなまのこあん浦すもあつらうを  
 見むべりけり源信明集云鏡うらてままそと志まの志ま  
 かきつておまこつ何ぞそれまのまのまのまのまのまのまの  
 のまの人のまのまの志まとハハ志まの  
 包あつて

一混布の事永享室町殿行幸記云河湯殿の上ま色と

置中よ混布箱蒲拾とありは混布の事何は用ある様も  
 未考追て可尋

一金鞭カナムチ 又ハ 鉄鞭の事走衆故實云と引をさし太刀をさき金鞭を  
 取りつらよさけて糸ゆ也中君走元とぞれたり付ハそと土  
 へまそ休へカナフチを杖に つまそ休あつて法真かきのからりめ  
 の事あつてぬ種のもさるるこららめ日柄の先は木をさし  
 もも又金を入るる長き人のあつてあつてぬ種も柄の  
 さき木をさし角をさし又如き入るる



伊勢平藏貞丈著

大傳馬町二丁目  
丁子屋平兵衛

